

法政大学 国際日本学研究センター 国際日本学研究所

Hosei University Research Center
for International Japanese Studies

The Newsletter



No.14 Apr.2011



2010年10月31日(日)～11月2日(火)
国際日本学シンポジウム
(2010年アルザスシンポジウム)
「日本のアイデンティティー形成と反響」
(アルザス欧州日本学研究所：フランス・キーンツハイム)



2010年12月11日(土)～12日(日)
国際シンポジウム
「日本民俗学・民族学の貢献－昭和前半」
(法政大学市ヶ谷キャンパス 富士見坂校舎 遠隔講義室)

C O N T E N T S

国際シンポジウム報告	2
2010年度第1回映画上映会報告	7
研究会報告	9
東アジア文化研究会報告	14
勉強会報告	24
研究所訪問報告	27
お知らせ	28
新刊案内	28

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

国際日本学シンポジウム

「日本のアイデンティティ—形成と反響—」

- 日 時：2010年10月31日(日)～11月2日(火)
- 会 場：アルザス欧州日本学研究所(フランス・キーンツハイム)
- 主 催：法政大学国際日本学研究所(HIJAS)、
フランス国立研究機構 UMR8155：東アジア文明研究所(CRCAO)、
ストラスブール大学日本学部、アルザス欧州日本学研究所(CEEJA)

法政大学国際日本学研究所(HIJAS)が「国際日本学」を掲げ、フランス諸学術組織と共催で行って来た国際シンポジウムは、2005年のパリ・シンポジウムから始めて、今回で6回を数える。このシンポジウムは、2007年からはアルザス欧州日本学研究所(CEEJA)に「居」を得て、欧州・日本双方から同数の研究者が集い、3日間、寝食を共にする形で実施されてきた。本年もそれにならって、欧州・日本双方からの計16名が同所で日本を内外から照射する共同作業を行った。

本年のシンポジウムは、この春に文部科学省支援事業に採択されたHIJASの〈日本意識〉をめぐる研究の中に位置づけられて、テーマとしては「日本のアイデンティティ—形成と反響」が掲げられた。〈日本意識〉の核にあるべき「日本のアイデンティティ」が歴史の転換期に、どのように探られていったのかが、様々な角度から検討されたのである。

この「様々な角度」ということで言えば、今回重要だったのは、「三角測量」が方法として明言されたことである。「内外の視点から」の「外」が、これまではほぼ西欧だったのを、そこにアジア(東アジア)の視点も加えることが行われたのである。王秀文(大連民族学院)、Hyung Il Pai(カルフォルニア大学サンタ・バーバラ校)の参加はその意味も持つものであった。その他ヨーロッパ側からの参加者も多彩で、Hans Dieter Ölschleger(ボン大学)、Rosa Caroli(ヴェネチア大学)、Annick Horiuchi(パリ・ディドロ大学)、Timon Screech(ロンドン大学 SOAS)、Josef Kyburz(CNRS)、Christiane Séguy(ストラスブール大学)、島田信吾(デュッセルドルフ大学)が発表を行った。また日本側からはHIJASの、ヨーゼフ・クライナー、鈴木裕輔、小口雅史、小林ふみ子、川田順造、安孫子信、星野勉が参加した(発表順、敬称略)。

＊

さて〈日本はどこから来て、今どこにいて、どこへ向かうのか〉を、グローバリゼーションが進行する今日、改めて問うという、この〈日本意識〉研究が、先立って問うべきなのが、〈日本とは何か〉というアイデンティティ問題である。今回のシンポジウムではこのアイデンティティの問題を、歴史上の先例を通して検討することが試みられた。アイデンティティが鋭く問題とされた歴史の先例として過半の発表が取り上げたのが、明治期であった(16発表のうち11)。ただそうだと、今回の発表の最も大きな区分けは、扱う時代が明治期であるか否かではなくて、それが、①アイデンティティの内容そのものを扱っていたか(9発表)、それとも、②アイデンティティの形成のされ方を扱っていたか(7発表)、によるものとなるであろう。もとより、形成のされ方を問い、そこに日本の特徴を言うとするれば、そ

の形成のされ方そのものが、アイデンティティの内容ともなる。逆に、アイデンティティの内容を、形成の局面から解き明かすこともしばしばなされていた。こうして、①と②の区別はいくぶんかは便宜的である。

＊

以上の留保の上で、①に属し、日本や日本文化全体のアイデンティティの問題を扱ったものを取り上げれば、古代に遡る「和の国」としてのアイデンティティを論じたもの(小林)、18世紀にすでに感じ始められていた外圧の影響下、きわめて美化された日本像を説いた西川如見の仕事を論じたもの(Horiuchi)、さらに大正期の石橋湛山の小日本主義を論じたもの(鈴木)、丸山真男の古層論を軸に周縁としての日本のアイデンティティを論じたもの(星野)があった。

①に属し、そのアイデンティティの(場合によっては否定的な)現れを一定のトピックに即して扱ったものとしては、「日本」という国号そのもののあいまいさを論じたもの(小口)、中国起源の端午の節句の日本での独特の展開を論じたもの(王)、江戸時代に西洋解剖学が導入されたとき、それが含む「汝自身を知れ」のメッセージがどう解釈されていったかを論じたもの(Screech)、明治期に創設される国家神道の徹底した西洋依存を論じたもの(Kyburz)、やはり明治期に導入された哲学が、その最初の導入者西周において、philosophyとどこがどう違っていたかを論じたもの(安孫子)があった。

他方で②に属するものがアイデンティティ問題で何より見ていたのは、アイデンティティが問題となるとき、すでにその問題の場は政治的な場であるということであった。アイデンティティは大なり小なり政治的な形成物であることを免れず、②の発表では、とくに明治期の国家・国民アイデンティティの政治的な形成の場が様々に明らかにされていったのである。まず、その有力な場の一つを民族学・民俗学に見て、その学問が植民地経営ならびに国家・国民アイデンティティ形成と文字通り不可分の三角関係を産むことを論じたもの(Ölschleger)、日本の民族学・民俗学が日本のアイデンティティ形成とどう歴史的に関わっていったかを概観したもの(クライナー)、伊波普猷における沖縄学創設と沖縄アイデンティティ形成の相互関係の確認を通して、柳田国男の日本アイデンティティの模索の意味を論じたもの(Caroli)、があった。

さらに、朝鮮が植民地化された後に、観光産業が、とくに宣伝を通じて、日本と朝鮮をつなぐアイデンティティ形成にどう力を発揮していったかを論じたもの(Pai)、明治期に新しい政治・社会の正当化に寄与する「復古」の物語(楠木正成神話など)がどう形成されていったかを論じたもの(川田)、明治期に新しい政

治・社会の形成にメディアが決定的にどう関わっていったかを論じたもの (Séguy)、さらにそれに教育の制度・内容がどう関わっていったかを論じたもの (島田) があった。

＊

以上の多彩な発表は近刊のシンポジウム報告集にすべて収録される予定である。そのとき、その報告集を

きっかけに、アルザスで行われたのに優る議論が、広く引き起こされていくことを期待したい。今回のシンポジウムは、いずれにしても、＜日本意識＞の再検討という HIJAS の現在の研究課題の今後の展開に、きわめて有益な示唆を与えるものであったと言える。

【記事執筆：安孫子 信

(法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授)】



討議の様子 (左から星野勉教授〔法政大学〕、安孫子信所長・教授〔法政大学〕、島田信吾教授〔デュッセルドルフ大学〕)



発表の様子 (タイモン・スクリーチ教授〔ロンドン大学〕)



全体討議の様子



シンポジウムの主な参加者による集合写真

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities «Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies: 'Japan-consciousness' in the Past, Present and Future»
Research Approach 4 “Triangulation of 'Japan-consciousness': into the Future”

International Japanese Studies Symposium:

« Japan's Identity: Its Formation and Repercussions »

Date: Sunday, 31 October – Tuesday, 2 November 2010
Location: Centre Européen D'Études Japonaises D'Alsace (France, Kientzheim)

Sponsors: Hosei University Research Center for International Japanese Studies (HIJAS), UMR8155 : Centre de Recherche sur les Civilisations de l'Asie Orientale (CRCAO), Strasbourg University Japanese Department, Centre Européen d'Études Japonaises d'Alsace (CEEJA)

This symposium saw a total of 16 presentations from 8 participants from Japan and 8 from Europe. In these presentations the formation of Japan/Japanese people's identity, and its repercussions, was examined from various eras and aspects. The Meiji period was cited as the historical era to have questioned Japan's identity most acutely. Presentations either dealt with 1) what the identity involved, or 2) how the identity was formed. For example, in 1) we can perceive Japan's identity represented in certain ways within the image of Japan as «Wa no kuni» or within the ambiguity of the country name of «Japan». Meanwhile 2) argues that identity formation is disconnected from politics, asking how, for example, the formation of state and nation in the Meiji period links to ethnology and folklore studies.

Report by: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

战略性研究基盤形成支援事業《基于国际日本学方法论的日本意识再探讨—日本意识的过去，现在，将来—》
研究课题 4 “日本意识的三角测量—面向未来”

国际日本学研讨会：

“日本特性—形成及影响”

会 场：阿尔萨斯欧洲日本学研究所（法国）
日 期：2010年10月31日（星期日）-11月2日（星期二）
主办方：法政大学国际日本学研究所（HIJAS），
法国国立科学研究所 UMR8155：东亚文明研究所（CRCAO），斯特拉斯堡大学日本学部，
阿尔萨斯欧洲日本学研究所（CEEJA）

日本和欧洲各有8名代表（合计16名）出席了本次大

会。会上，代表们从不同的时代以及各种层面就日本以及日本人特性的形成和影响作了综合讨论。在各个不同的时期中，尤其针对明治时期的讨论尤为热烈。而在讨论的内容上，本次大会主要又可分为以下两点。1，就日本特性的内容本身进行的讨论。2，就日本特性的形成方法进行的讨论。比如，“大和”的称号以及“日本”这一国号的笼统性都能反映出一定的日本特性。另外就第二点来说，日本特性的形成与政治因素并无多大牵连。比如，明治时期的民族学和民俗学与日本及其国民特征的形成具有怎样的联系这一问题在本次会上受到了很大的关注。

【执笔者：安孙子 信

（法政大学国际日本学研究所所长・文学部教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 《국제일본학 방법에 기초한 <일본 의식> 재검토—<일본 의식> 의 과거・현재・미래》
연구④ <일본 의식> 의 삼각측량—미래를 향해

국제일본학 심포지엄

일본의 아이덴티티—형성과 반향

일 시：2010년10월31일(일)～11월2일(화)
장 소：알자스 유럽 일본학연구소(프랑스 킌츠하임)
주 최：호세이대학(法政大学) 국제일본학연구소(HIJAS),
프랑스 국립과학연구소 UMR8155 : 동아시아
문명연구소(CRCAO),
스트라스부르(Strasbourg) 대학 일본학부,
알자스 구주 일본학연구소(CEEJA)

이번 심포지엄에서는 일본에서 8명, 유럽에서 8명, 총 16명이 참가하여 일본 및 일본인의 아이덴티티 형성과

반향에 대해서 다양한 시대에 여러 각도로 검토되었다. 다양한 시대 중에서도 해도 일본의 아이덴티티가 가장 날카롭게 지적된 역사적 시기는 메이지(明治) 기이다. 이번 발표는 ①아이덴티티의 내용 그 자체를 다룬 것 ②아이덴티티의 형성방법을 다룬 것으로 크게 두 가지로 나뉘었다. ①에서는 예를 들면 ‘와(和)의 나라’라는 일본의 이미지와 ‘일본’이라는 국호의 애매모호한 표현 속에 일본의 아이덴티티를 엿볼 수 있다는 것이 주장되었다. 한편 ②에서는 아이덴티티 형성은 정치와 무관하다고 할 수 없다는 점, 예를 들면 메이지(明治)기에 민족학, 민족학이 어떤 방법으로 국가 및 국민의 아이덴티티 형성에 관련되었는지가 논의되었다.

【기사 집필：아비코 신

(安孫子信, 호세대학 국제일본학연구소 연구소장・문학부 교수)】

国際シンポジウム

『日本民俗学・民族学の貢献—昭和前半』

- 日 時：2010年12月11日(土)、12日(日) 10:00～17:30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 富士見坂校舎1階 遠隔講義室

近代日本の意識の成立にもっとも貢献してきた専門分野は、日本民俗学と民族学ないし文化人類学の二つであることは確かである。また、20世紀を通じて日本意識を常に自らの研究の最終目的・対象としてきたこともこの二つの人文科学である。今年度の研究アプローチ②は、6月及び9月に研究会を開いたうえで、12月に今年度の研究の締めくくりとして国際シンポジウムを開催した。学内・国内はじめアメリカのスタンフォード及びプリンストン大学、ドイツのボン大学、韓国のソウル国立大学など海外の研究機関からも報告者が参集した。

この研究アプローチ②は、今年度で昭和の戦前時代から昭和30年代終わりごろまで約40年の期間を取り上げる計画をした。それは、この両専門分野における大きな転換期であっただけではなく、日本意識自体はその数十年間の間に非常に大きく変化してきたからである。昭和初期の多民族国家の大日本帝国とその植民地から戦争時期における大東亜共栄圏の思想、あるいは日本軍が占領した幅広い東南アジア及び太平洋地域の諸民族との接触支配にうつてかわり、終戦時に連合国軍に占領された、少なくとも自己認識で単一民族国家となった現代日本の政治的変遷にともなう、いうまでもなく「日本とは何か」、「日本人とは何か」という意識も大きく揺らいで変わってきた。しかし、これはあまりにもテーマが大きく、すでに研究会の段階では時期を二つにわけて、今年度は昭和前半を研究対象とし、来年度は昭和20年から40年までの日本民俗学と民族学の発展に目を向けることにした。

この度の国際シンポジウムでは、日本意識という大きな他の発表にまたがる立場から取り上げたのは、スタンフォード大学のベフ先生、締めくくりとして戦争民族学の国際的比較を行ったボン大学のオイルシュレーガー先生の発表があった。そのほかの発表は、テーマごとのグループで行われた。

両みんぞく学の研究対象たる民族あるいは土俗から民俗への変遷などは、国立ソウル大学校の全先生、神奈川大学の福田先生、戦後の問題にふれながら川田順造先生が取り上げた。台湾の学会を分析し報告

したのは、笠原政治先生、植野弘子先生、野林厚志先生であった。台北帝大で設立された土俗人種学講座は、いわゆる蛮族(原住民族)の研究を取り上げた。その場合は、戦後、沖縄研究で名をはせた若い馬淵東一の役割は大きかった。それと全く違った見方は、昭和16年から雑誌『民俗台湾』を発行したグループで、それを台湾の中国人社会の民俗学的研究を目指して柳田国男の指導を求めた。柳田はどこまで大東亜民俗学を考えていたのか聊か不透明である(川村湊先生の報告)。昭和9年から10年にかけて内地日本で重要な動きがあった。澁澤敬三中心の日本民族学会設立には、岡正雄も活躍の場を得て、民族学博物館設立運動が開始された(近藤雅樹先生の報告)。それとほぼ同時に柳田遷暦記念日本民俗学講習会の席で日本民間伝承の会が設立され、植民地を含んだ全国ネットワークができあがった。そのネットワークのなかの個人の社会的な状況を非常にわかりやすく紹介したのは鶴見太郎先生であった。一般的には一国民俗学という方向に走ったと考えられている民間伝承の会は、案外国際的な面があったことが石井正己先生の報告で示された。柳宗悦の民芸運動もやはり朝鮮の李王朝の美的観念から出発し展開された(松井健先生の報告)。朝鮮における両みんぞく学の動きについて、伊藤垂人先生、崔古城先生の報告があり、北支(中国北部)の農村調査とそこで論じられた理論的枠組が日本研究にどのように影響したのか、清水先生のご報告があった。来年度の研究テーマへの橋渡しの役割として、英語圏の日本研究について発表を広げたのは、ボロボイ先生がベネディクトの『菊と刀』の新しい解釈を、また、桑山敬己先生の日本のイエ概念が外国の日本研究にどう影響を及ぼしたのかという新しい研究が紹介された。それぞれのテーマの報告が多かったため、報告者には短時間の報告時間を厳守して頂き、十分な討論の時間が確保できた。二日間にわたって80人の参加者があった。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー

(法政大学国際日本学研究所兼担所員・国際戦略機構特別教授)】



ヨーゼフ・クライナー研究アプローチリーダー



挨拶する安孫子所長

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities «Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies: 'Japan-consciousness' in the Past, Present and Future»
Approach 2 "Establishment of Modern 'Japan-consciousness': Issues of Folklore Studies and Ethnology"

International Symposium

"Contribution of Japanese Folklore Studies and Ethnology: Early Showa"

Date: Saturday, 11 and Sunday, 12 December 2010, 10:00-17:30

Place: Hosei University Ichigaya Campus, Fujimizaka Building 1F Remote Conferencing Room

The specialist fields that contributed most to the establishment of modern Japanese consciousness are surely folklore studies and ethnology. In addition, during 20th century these two humanities became the ultimate objective and focus in researching Japan consciousness.

This research for Approach 2) aimed at the 40 years from prewar Showa until the end of the Showa 30s. We see a great turning point for both specialist fields, and extreme

change in Japan consciousness itself during these few decades.

This year saw a focus on research of early Showa, while next year will concentrate on folklore studies and ethnology from Showa 20-40.

This symposium picked up on other presentations given on the theme of "what is Japan consciousness?", and, as a closing study, carried out a comparison on wartime ethnology internationally. Other presentations were held in groups on separate themes. Important issues were raised in Taiwan, on the Korean Peninsular, and in the so-called "inland" from Showa 9-10. We were introduced to a new commentary on Benedict's *Chrysanthemum and Sword*, and to new research on how the Japanese family(*ie*)-concept has influenced Japanese studies abroad. As there were many reports on each theme, time was regulated in order to ensure sufficient time for discussion. The 2 days saw 80 participants.

Report by: Josef KREINER (Professor and Special Adviser, Hosei University Center for International Japanese Studies, Planning and Strategy Division)

文部科学省私立大学戦略性研究基盤形成支援事業《基于国际日本学方法论的日本意识再探讨—日本意识的过去, 现在, 将来—》

研究课题2 “近代日本意识的成立—日本民俗学・民族学の問題—”

国际研讨会

“日本民俗学・民族学的贡献—昭和前期”

会 场: 法政大学市谷校区 富士见坂校舍1楼 远程教室

日 期: 2010年12月11日(星期六), 12日(星期日) 10:00-17:30

不言而喻, 日本民俗学和民族学是对近代日本意识的形成最具影响力的两个领域。整个二十世纪, 这两个领域始终将日本意识作为其研究对象及最终目标。本年度

将昭和前期作为考察对象, 明年将致力于探讨昭和20年到40年这段时期内的日本民俗学・民族学的具体发展。

本次研究的时间跨度前后约为四十年, 具体是从昭和前的战争时代至昭和30年为止。这段时期是不仅是日本民俗学和民族学的转换期, 日本意识在这段时间内也发生了巨大的变化。

本次国际研讨会的最后, 还就战争民族学进行了国际性的比较分析。大会上分门别类, 各位专家就台湾, 朝鲜半岛问题, 日本所谓的“家”这一概念问题, 《菊与刀》的全新解读等问题, 作了详尽而充实的报告。本次大会的参加人数多达80名。

【执笔者: 约瑟夫 库拉伊纳

(法政大学国际日本学研究所兼任研究员・法政大学国际战略据点特聘教授)】

전략적 연구기반 형성 지원사업 《국제일본학 방법에 기초한 〈일본 의식〉 재검토—〈일본 의식〉의 과거・현재・미래》
연구② 근대 〈일본 의식〉의 성립—일본민속학・민족학의 문제 국제심포지엄

일본민속학과 민족학의 공헌

—쇼와(昭和) 전반기 (1926 ~ 1945)

일 시: 2010년12월11일(토), 12일(일) 10:00 ~ 17:30

장 소: 호세대학 이치가야(市ヶ谷) 캠퍼스 후지미자카(富士見坂) 교사1층 원격강의실

근대일본의 의식성립에 가장 많은 공헌을 해 온 전문 분야는 일본민속학과 민족학이다. 또한 20세기를 통해 일본 의식을 항상 자신들의 연구의 최종목적 및 대상으로 해 온 것도 이 두 분야의 인문과학이다.

연구②는 쇼와원년부터 쇼와30년대말경 (1926 ~ 1964) 까지 약40년의 기간을 다루기로 했다. 이 기간은 두 전문분야에 있어서 큰 전환기였을 뿐 아니라 일본 의식 자체가 그 수십년간 사이에 크게 변화해 왔기

때문이다.

금년도는 1926년부터 1944년까지를, 내년도에는 1945년부터 1965년까지의 일본민속학과 민족학 발전을 연구대상으로 하기로 했다.

이번 국제심포지엄에서는 일본 의식이란 무엇인가라는 큰 주제의 다른 발표와도 상통하는 입장에서 거론하고 마무리로 전쟁민족학을 국제적으로 비교를 했다.

그 외의 발표는 테마별 그룹으로 나뉘어 진행되었는데 주로 대만, 한반도, 일본 본토에 대해 1934년부터 10년에 걸친 중요한 활동을 다룬 보고가 있었다. 영여권의 일본 연구에 대해서 베네딕트의 '국화와 칼'의 새로운 해석과 더불어 일본의 이에(가족) 제도라는 개념이 외국의 일본 연구에 어떤 영향을 끼쳤는지에 대한 새로운 연구가 소개되었다. 각 테마별 보고가 많았던 만큼 보고자들께서 단시간의 보고시간을 엄수해 주셨기에 충분한 토론시간을 확보할 수 있었다. 이틀간에 걸쳐 80명이 참가했다.

【기사집필: 요셉 클라이너

(호세대학 국제일본학연구소 겸임 소원 국제전략기구 특별교수)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」

2010 年度第1回映画上映会

『うつし世の静寂（しじま）に』

●制 作：ささらプロダクション

●監 督：由井 英

●日 時：2010 年 10 月 17 日（日）14：00 ～（上映）、15：45 ～講演・鼎談

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 外濠校舎 さったホール

●司 会：田中 優子（法政大学社会学部教授）

アプローチ①「日本意識の変遷」では、2010 年 10 月 17 日に映画の上映会をおこなった。ささらプロダクションのドキュメンタリー映画『うつし世の静寂（しじま）に』である。まだ都心での本格的な上映が始まっていない映画であったが、プロダクションのご厚意で、実現できた。

日本をどう考えるか、どういう側面から日本を見るか、という問題は、歴史書や思想書や文学だけでなく、あらゆる表現によって考えることができる。沖縄文化研究所が沖縄の貴重な記録映像の数々を上映したように、国際日本学研究所もいずれは、定期的に、日本を考える映画を連続上映し、そこに対談や講演、座談会を組み合わせる、という案を私はもっている。まずは日本意識プロジェクトでそれを始めようと考え、協力していただけたプロダクションの映画から始めたのである。

『うつし世の静寂に』は、日本についてのいくつかのテーマをもっている。ひとつは「講」の役割である。日本の集落には、講、座、結、組など、小さな組織が多種あり、人々はその複数の組織に属して共同体を運営していた。その中で講は中世では仏教をひろめるためのものであったが、江戸時代では経済活動にもかかわる様々な機能をもっていた。念仏を唱え共に食事をし、伊勢や善光寺参りなどの金を工面し、結婚や家屋修理のための費用を融通してきたのだ。講では必ず掛け軸をかける。掛け軸には阿弥陀如来や菩薩が描かれている。講では、現世（うつしよ）に生きる人間がものごとを決める際、神や仏が同座したのだった。無尽講で金銭のやりとりをする時にも、神仏はそれを見ている。

『うつし世の静寂に』は、大都会である川崎市を撮った映画だ。しかしそこに「念仏講」が残っている。掛け軸をかけ、共食し、数珠をまわす。講が残っているということは、この大都会に信仰を軸にした共同性が残っている、ということの意味する。実際に念仏講だけではなく、「巡り地蔵」も現存する。巡り地蔵とは、地蔵菩薩を厨子に入れ、それを家から家へ受け渡す習俗のことだ。それぞれの家ではその地蔵に子供の無事と成長を祈って数日を過ごし、さらに別の家に受け渡す。互いに受け渡す関係が残っていないと、存続できなかったはずである。

このように『うつし世の静寂に』からは、表面的な現代日本の姿ではなく、ふだんは見えない祈りの生活が立ち上ってくる。そこには個人の信仰ではなく、宗教団体でもなく、祈りを基盤にした共同体の姿が見える。日本の信仰のありようを知ることができる。

祈りを基盤にした共同体に祭は欠かせない。映画の

クライマックスは三匹獅子舞である。この映画では、初山という集落が、明治の神社合祀によってやしらが消滅した森に、100 年ぶりに三世代の獅子舞を奉納する様子が映されている。神社ではなく森に向かうその姿に、祭の本質が見える。神社とは集落にある山、森、岩、齢を重ねた樹木、谷戸を流れ来て水田に満ちる水、そこに住まう蛙や蛭や鳥やありとあらゆる生き物たちに、祈りを捧げる場所であった。人が自然の中に、己を位置づけ直す空間であった。神社の本来の意味が、神社の無い森にこそ見えてくる。

仏教なのか神道なのか、それは日本の共同体にはどうでもよかった。祈りはそれぞれの土地の、その自然と産業（農業、林業、漁業など）に深く結びついていた。この映画では、谷戸が暮れて蛙が鳴き蛭が飛び交い明けて行くまでの光景、畔（くろ）を作った山の水を入れるシーン、森や田畑の情景などが、長い時間映される。この自然の恵みこそが、講や巡り地蔵や獅子舞が向き合っている相手であり、祈りの対象だったのである。人の生活文化が自然と結びついていたその姿を、私はこの映画で、初めて見る事ができた。

映画終了後、ささらプロダクション代表でプロデューサーの小倉美恵子氏、監督の由井英氏、田中優子の3人で鼎談をおこなった。小倉さんはこの映画の舞台となった川崎市宮前区の出身である。1980 年代に仕事でアジアの留学生たちと関わった。風土とつながりあう身体を歌や踊りのかたちで表現できる留学生たちをみつめながら、日本における近代と風土のギャップを強く感じたという。本当のグローバリズムに至るためには、地元学が必要だと考えた小倉さんは、自分で川崎のお百姓の姿を撮り始めた。そこに、監督の由井英氏が加わることで、本格的な映画作りが始まった。

ささらプロダクションはすでに『オオカミの護符』という映画を作っている。そのときに二人は「御嶽講」に出会う。そこからさらに講の世界を追求しようと、『うつし世の静寂に』が出来上がった。この映画で映された獅子舞の奉納が「100 年ぶりであった」ということから、話題は 100 年前の日韓併合や大逆事件へと移った。神社合祀がこの時期におこなわれたのであろうことが話題となり、日本国家が共同体に介入してきた歴史も浮かび上がる。

映画は単に鑑賞するだけでなく語り合うことによって多面的な解釈が可能となり、理解はさらに深まる。来年度は上映会をより拡大して実現したい。

【記事執筆：田中 優子（法政大学社会学部教授）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities «Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies: 'Japan-consciousness' in the Past, Present and Future»
Approach 1 "Changes in 'Japan-consciousness': from Ancient to Early Modern Eras"

Film Screening Meeting 2010

Screening of *Utsushiyo no Shijima ni*

Production: Sasara Production
Director: YUI Suguru
Date: 17th October 2010, 14:00- (screening), 15:45- (talk, discussion)
Venue: Hosei University Satta Hall, Hosei University Ichigaya Campus, Sotobori Building
Chair: TANAKA Yuko (Professor, Hosei University Faculty of Social Sciences)

Approach 1 "Changes in 'Japan-consciousness' held a film screening on 17 October, 2010, of the documentary film, *Utsushiyo no Shijima ni*. One theme of this film is

"ko". There were many small organizations such as ko, za, musubi and kumi within a Japanese settlement, and the people brought the community to life by belonging to these organizations. This film was shot in the city of Kawasaki, where a "nenbutsu ko" remains. Its members hang up scrolls, eat together, and turn their rosaries. It displays the lives of prayer of Japanese people not usually seen. The climax of the film is the shishi lion dance. It records the lion dance being offered in a forest that has lost its shrine. The essence of the festivities is the lack of a shrine in the forest. A shrine was simply a place of worship of the natural features within a settlement, and the life that lived there. After the screening, the producer and director talked about the film with Tanaka Yuko. Discussing the film led to multi-faceted commentary, and deepened understanding. It is hoped that film screening meetings will play a greater role next year.

Report by: TANAKA Yuko (Professor, Hosei University Faculty of Social Sciences)

文部科学省私立大学戦略性研究基盤形成支援事業《基于国际日本学方法论的日本意识再探讨—日本意识的过去, 现在, 将来—》

研究课题 1 “基于国际日本学方法论的日本意识的变迁—古代到近世—”

电影“今世的静寂”的公映大会

出品: 萨萨拉
导演: 由井 英
日期: 2010年10月17日 (星期日) 14:00- (公映), 15:45-演讲・座谈会
会场: 法政大学市谷校区 外濠校舍 萨塔演讲厅
主持人: 田中 优子 (法政大学社会学部教授)

本次研究会于2010年10月17日举行。会上放映了纪录

片“今世的静寂”。这部电影是围绕“讲”这一主题展开的。在日本的村落里有着许多类似于讲, 座, 结, 组等小型组织。人们分属于这些团体, 从而形成了一个共同体。这部电影是以川崎这个大城市为背景的, 在那里至今仍留有一个名为“念佛讲”的传统活动。在这个活动中可以看到人们挂横幅, 共饮共食, 念珠等祈祷的场面。电影的高潮是在没有神社的森林里举行了已经100年没有举行过的狮子舞仪式。在没有神社的森林里举行这样的仪式, 恰好能够体现祭祀的本质。电影结束后, 出品人, 导演和田中优子三人进行了座谈。对于影片的理解不仅仅是通过个人的单独鉴赏可以获得, 相互间的对话与交流同样能使对于影片的理解进一步升华。

【执笔者: 田中 优子 (法政大学社会学部教授)】

전략적 연구기반 형성 지원사업 《국제일본학 방법에 기초한 <일본 의식> 재검토—<일본 의식>의 과거・현재・미래》
연구① <일본 의식>의 변천—고대에서 근세로

2010년도 영화상영회

‘현세의 정적’ 상영회

제작: 사사라 프로덕션
감독: 유이 스구루 (由井 英)
일시: 2010년10월17일 (일) 14:00 ~ (상영), 15:45 ~ 강연・정담
장소: 호세대학 이치가야캠퍼스 소토보리 (外濠) 교사 샷타홀
사회: 다나카 유코 (田中 優子, 호세대학 사회학부 교수)

연구① 일본 의식의 변천에서는 2010년10월17일 다큐멘터리 영화 ‘현세의 정적’을 상영하였다. 이 영화 테마의 하나는 ‘강 (講)’이다. 일본의 취락에는 강 (講), 좌 (座), 결 (結), 조 (組) 등 작은 조직이 여러 종류가 있고 사람들은 저마다 조직에 소속되어 공동체를 운영했다. 이

영화는 대도시인 가와사키시 (川崎市) 에서 촬영했는데, 그 곳에는 ‘염불강 (念佛講: 염불수행을 위한 신자들의 모임)’ 이 남아 있다. 족자를 걸고 함께 먹고 염주를 돌린다. 흔히 볼 수 없는 일본인의 기원하는 생활을 볼 수 있다. 영화의 클라이맥스는 사자춤이다. 이 영화에서는 신사합사 (神社合祀) 로 인해 신사가 없어진 숲에 3세대 사자춤을 100년만에 봉납하는 모습이 촬영됐다. 숲으로 향하는 모습 속에 일본의 축제인 마쓰리의 본질이 보인다. 신사는 취락이 있는 산, 숲, 바위, 나무, 물, 그곳에서 서식하는 개구리, 반디, 새 등 온갖 생물들에게 기원하는 장소이다. 영화종료후 프로듀서와 감독, 그리고 다나카유코 (田中 優子) 교수, 세 분의 정담이 있었다. 영화는 단순히 감상하는 것 만이 아니라 서로 대화함으로써 다면적으로 해석할 수 있고 더욱 깊이 이해할 수 있다. 내년도에는 상영회를 확대시켜 개최하고 싶다.

【기사 집필: 다나카 유코

(田中 優子, 호세대학 사회학부 교수)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」

2010 年度アプローチ①「日本意識の変遷」

第 1 回研究会

報告者 1: 吉田 真樹 (静岡県立大学国際関係学部准教授)

報告者 2: 小林 ふみ子 (法政大学キャリアデザイン学部准教授)

● 日 時: 2010 年 10 月 9 日 (土) 13:00 ~ 17:15

● 会 場: 法政大学市ヶ谷キャンパス 80 年館 7 階 中会議室

● 司 会: 田中 優子 (法政大学社会学部教授)

報告 1: 吉田真樹

「倫理学・日本倫理思想史の観点からみた「日本意識」

倫理学・日本思想史という学問は、特殊を媒介として普遍を捉えようとする立場を取るため、日本研究ではない。しかし、普遍性に重心を置くなら「日本意識」は国家意識のひとつとしてのローカル意識となり、特殊性に重心を置く場合には、「この私の問題」となり、その拡張形態が「日本意識」となる。

「日本意識」という語を他の類義語と比べるなら、次の通りとなる。すなわち、「日本精神」は「日本人のみが持つ民族精神」のことで、特に戦時中に強調された。「大和魂」も「日本精神」とほぼ同義で、本来は「理論知に対する実践知」の意だが、日露戦争以降は、「文明以外の部分としての日本人の精神力」という意味で捉えられた。「日本思想」は「日本という地域にあった思想」のことで、近代特有の捉え方を示す学術用語である。一方、「日本意識」は、「日本に対する意識」「平時の考え」「主体が曖昧」という特徴を持っている。しかし、日本「国家」の意識に限定されず、主体は日本国民であるため、「日本精神」や「大和魂」よりも幅の広い語であると言える。

「意識」とは常に対象を持つもので、「日本意識」という場合の対象は日本である。そして、対象が主体であれば自己意識となり、「日本意識」は「自己としての日本」を意味し、対象が客体の場合は他者意識となり、「日本意識」は「他者としての日本」となる。そのため、「自己としての日本」という捉え方がいつ現れ、確立したかが問題となるだろう。

倫理学・日本思想史の分野では、和辻哲郎が『日本倫理思想史』の中で「国民的自覚」を分析しているが、これは、日本人による「自己としての日本意識」を徹底させたものである。和辻は、「意識」ではなく「自覚」という語を用いており、想定される自覚の主体は最初から間柄存在であり、個人ではなかった。そのため、『日本倫理思想史』は一貫して「国民的自覚」ないし「国民的全体性の自覚」という観点から叙述されている。そして、和辻は「国民」を「国家」に先行するものと考え、潜在的な「国民」としての全ての人々、すなわち間柄存在が「国民的自覚」の主体であると理解し、「国民的自覚」が顕在化する過程を描こうと試みた。従って、和辻の考えに基づくなら「日本」という外枠の問題は解決されたことになる。「日本意識」の研究においては、「国家」を形成した、天皇を中心とする上層部から下層部の国民の間に広まった「日本意識」の展開を丁寧に跡付けることが必要となる。

【記事執筆: 鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

報告 2: 小林ふみ子

「『和らぐ国』というアイデンティティ」

日本人は、自分たちをどのような人々として認識し、その国をどのような特徴をもつものとして考えてきたのでしょうか。幾多の日本論・日本人論が世に出され続け、消費され続ける今日であっても、その認識を歴史的な視野をもって把握し、変化をたどろうとする研究対象は明治以後、戦後のそれに限られています。それ以前の時代の、日本人の自画像はどのようなものだったのでしょうか。

本発表では、その問題について言説上の表現の次元で考察しました。「和国」という日本の呼称を訓読するところから生まれた「和らぐ」「和らかな」国という表現が繰り返されることで、「和」という言葉の含意の幅でこの国を理解する認識が生じていた可能性を指摘しました。

たしかに『日本書紀』継体天皇の条に日本(やまとのくに)が「やわら」いだという記述、同じく推古天皇の条に十七条憲法に「和なるを以て貴」とされたという記述はあります。しかし基本的には古代中国の史書以来確認できる「倭」の別表記に過ぎなかったこの「和」なる漢字が生みだしたに過ぎない認識です。ところが中世の『古今和歌集』仮名序の注に「やまと歌」を「大きやはらぐ」ものとして解釈する例などが確認でき、近世にいたって、日本がこのような表現によって「やわらかい」言葉を話し、平和で穏やかな気風を持つ国として表されている種々の例、またこれがたびたび好色文学の口実にも用いられた例など少なからずあることを概観しました。

当日の議論でも出ましたが、好色の正当化は『源氏物語』や『伊勢物語』のカノン化とも密接にかかわる問題ですし、一見して、さもありませんと思われる議論かもしれません。しかし一方で、近世日本においては武家政権が長らく支配してきた「武国」であるとする認識があったことも事実で、「大和魂」なる言葉が近世の段階ですでに潔さや負けん気の強さを表す言葉にもなっていたこと、近代にはさらに過激な意味をこめて使われたことを考えると、「和なる国」は忘れられたもう一つのアイデンティティ表現と言えないでしょうか。

本発表では、幕末から明治にかけてこの表現がどうなっていたのかについては扱いきれませんでした。これをさらに深めアルザスで報告したいと思います。

【記事執筆: 小林 ふみ子

(法政大学キャリアデザイン学部准教授)】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities « Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies: 'Japan-consciousness' in the Past, Present and Future »
Research Approach 1 "Changes in 'Japan-consciousness': from Ancient to Early Modern Eras".

1st Research Meeting 2010

Reporter 1: YOSHIDA Masaki
(Associate Professor, Faculty of International Relations, University of Shizuoka)
Reporter 2: KOBAYASHI Fumiko
(Associate Professor, Faculty of Life-long Learning and Career Studies, Hosei University)
Date: Saturday, 9 October 2010, 13:00-17:15
Location: Hosei University Ichigaya Campus '80 Building 7F Middle Conference Room
Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

Report 1: YOSHIDA Masaki "Japanese Consciousness' seen from the Viewpoint of Ethics and Japanese History of Ethical Thought"

This report began by indicating how ethics and the history of Japanese thought are related to the issue of 'Japanese consciousness'. It then examined the intension and denotation of the similar terms, 'Japanese sentiment', 'Yamato damashii' and 'Japanese thought', showing 'Japanese consciousness' to be much broader. In *Nihon Rinri Shisoshi*, Watsuji Tetsuro considers a stagnant "Nation" to precede "State" in leading the way in "national realization". His attempt to describe this process provides an explanation of the outer frame, "Japan". In research on 'Japanese consciousness' it is necessary to observe its spread to lower-level nation from upper-level emperor: the formation that created the "State".

文部科学省私立大学戦略性研究基盤形成支援事業《基于国际日本学方法论的日本意识再探讨—日本意识的过去，现在，将来—》

研究课题 1 “日本意识的变迁—古代到近世”

2010 年度 第一次研究会

报告者1：吉田 真树
(静岡県立大学国际关系学部副教授)
报告者2：小林 文子
(法政大学职业设计学部副教授)
日 期：2010年10月9日(星期六) 13:00-17:15
会 场：法政大学市谷校区 80年馆7楼 中会议室
主持人：田中 优子(法政大学社会学部教授)

报告1: 吉田真树
“从伦理学・日本伦理思想史的观点看日本意识”

本次报告中，吉田教授首先剖析了伦理学・日本伦理思想史这一学术领域与日本意识的关系。其次，通过探讨“日本精神”“大和魂”“日本思想”等与“日本意识”极为类似的词汇来说明“日本意识”一词具有更为广泛的外延。另外，和辻哲郎的《日本伦理思想史》一书也被用

Report by: SUZUMURA Yusuke (Guest Scholar, Hosei University Center for International Japanese Studies)

Report 2: KOBAYASHI Fumiko "Identity as 'Yawaragu Kuni'"

How do Japanese people acknowledge themselves, and what characteristics do they consider their country to possess? Such research is limited to post-Meiji and post-war. How did Japanese picture themselves in earlier eras?

This presentation looks at the dimension of literary expression. "Yawaragu" (ease, soften) came from the Japanese reading of "Wa koku", the name for Japan, and it is possible that the nuance behind this word has played a role in perceiving the country.

Although appearing in *Nihonshoki*, it is as a mere alternative character for "Wa", the word for Japan in ancient China. However medieval commentary *Kokin Waka Shu* contains a reading of "Yamato" as "Ookini yawaragu", and by the Early Modern period, Japanese is described as a "soft" language, and the country as peaceful and with a moderate climate. This kind of expression appears frequently in erotic literature. This developed from canonization of works such as *Genji Monogatari* and *Ise Monogatari*. Considering that, the term "Yamato damashii" had meaning of hardness, "Yawaragu Kuni" could be seen as a forgotten expression of identity.

This presentation did not handle expressions from the end of Edo into the Meiji period, but they will be included in a report given in Alsace.

Report by: KOBAYASHI Fumiko (Associate Professor, Faculty of Life-long Learning and Career Studies, Hosei University)

来做引证。遵从和辻的推理，“国家”这一概念的外延问题就将得到解决。

【执笔者：铃村 裕辅(法政大学国际日本学研究所客座研究员)】

报告2: 小林文子
“有关“和国”的意识形态”

本次报告对“和国”的“和”字的含义出发来理解“日本”这一概念的可行性作了全方位的论证。《日本书记》继体天皇这一条目里就已经出现了“和国”一词。而在推古天皇条目中的十七条宪法里同样可以找到“以和为贵”的陈述。当然这个“和”字只不过是“倭”字的另外一种记述方式而已。到了中世，在《古今和歌集》的假名序的注释中，出现了将“和歌”解释为“大和”的产物的这种表现方式。到了近世，很多文学作品中将日语说成是“柔和”的语言，将日本人的生活描绘成平和而安稳的状态。此外在很多的好色文学里也出现了类似的表现方式。本次汇报中没有涉及到幕府末期以及明治时期的“和”这一词的含义，关于这点今后将继续探讨。

【执笔者：小林 文子(法政大学职业设计学部副教授)】

전략적 연구기반 형성 지원사업 《국제일본학 방법에 기초한
〈일본 의식〉 재검토-〈일본 의식〉의 과거·현재·미래》
연구① 〈일본 의식〉의 변천-고대에서 근세로

2010 년도 제 1 회 연구회

보고자1: 요시다 마사키(吉田 真樹) (시즈오카현립(靜岡県立) 대학 국제관계학부 준교수)

보고자2: 고바야시 후미코(小林 ふみ子) (호세대학
커리어디자인학부 준교수)

일 시: 2010년10월9일(토) 13:00 ~ 17:15

장 소: 호세대학 이치가야(市ヶ谷) 캠퍼스 80년관7
층 중회의실

사 회: 다나카 유코(田中 優子, 호세대학 사회학부
교수)

보고1: 요시다 마사키(吉田 真樹)

윤리학·일본윤리사상사 관점에서 본 ‘일본 의식’

요시다 마사키(吉田 真樹)의 보고 ‘윤리학·일본윤리사상의 관점에서 본 일본 의식’에서는 첫번째로 윤리학·일본사상사라는 학문이 ‘일본 의식’ 문제와 어떻게 관계하는지가 지적되었다. 다음으로 ‘일본 의식’, ‘야마토 정신(大和魂)’, ‘일본 사상’이라는 ‘일본 의식’에 유사한 단어의 함축된 의미와 외연적 관계를 검토하고 ‘일본 의식’이 ‘일본 정신’이나 ‘야마토 정신’보다 폭넓은 말이라는 것이 밝혀졌다. 그리고 윤리학과 일본사상사의 분야에서도 일본인에 의한 ‘당사자로서의 일본 의식’을 검토한 와쓰지 데즈로(和辻 哲郎)의 ‘일본윤리사상사’를 예로 들어 그 지론을 분석했다. 와쓰지는 ‘국민’을 ‘국가’에 선행한다고 하고 잠재적인 ‘국민’으로서 모든 사람들, 즉 공간적, 사회적으로 규정된 존재(間柄的存在)가 ‘국민적 자각’의 주체가 된다고 생각한 와쓰지는 ‘국민적 자각’이 현재화하는 과정을 그리려고 시도하였다. 따라서 와쓰지의 의견에 근거하면 ‘일본’이라는 바깥 테두리의 문제는 해결됐다는 말이 된다. ‘일본 의식’ 연구에 있어서 ‘국가’를 형성한 천황을 중심으로 하는 상층부에서 하층부의 국민들 사이에까지 퍼진 ‘일본 의식’ 전개에 대해 자세히 추적해 조사할 필요가 있다.

【기사집필: 스즈무라 유스케

(鈴木 裕輔, 호세대학 국제일본학연구소 객원 학술연구원)】

보고2: 고바야시 후미코(小林 ふみ子)

‘평온한 나라’라는 아이덴티티

일본인은 스스로를 어떠한 사람으로 인식하고, 그 나라가 어떤 특징을 갖고 있다고 생각해 왔을까? 수많은

일본론 또는 일본인론이 잇따라 출판되고 소비되는 오늘날이지만 이 인식을 역사적인 시야로 파악하고 변화를 살피고자 하는 연구는 메이지(明治) 시대 이후, 2차대전이후에 한정되어 있다. 그 이전 시대의 일본인의 자화상은 어떠한 것이었을까?

본 발표에서는 이와 같은 문제에 관하여 연설(言説)상 표현의 차원에서 고찰했다. ‘와고쿠(和国)’라는 일본어 호칭을 혼독하는 것에서 생긴 ‘야와라구(온화하게)’, ‘야와라카나(온화한)’나라라는 표현이 반복됨으로 인해 ‘와(和)’라는 단어가 함축한 의미에서 이 나라를 이해하는 의식이 생겼을 가능성을 지적했다.

명백히 ‘일본서기(日本書紀)’ 케이다이텐노(継体天皇)의 조문에 일본(야마토 나라)이 ‘야와라이다(온화하다)’라는 기술이, 또한 스이코텐노(推古天皇)의 조문중 17조헌법에 “평화를 중시한다(和なるを以て貴)”는 기술이 있다. 그러나 고대 중국의 사서이래 확인가능한 ‘와(倭)’의 다른 표기에 불과한 ‘와(和)’라는 한자가 이러한 표현을 만들어 낸 것에 지나지 않는다는 것이 기본적인 인식이다. 그러나 ‘고킨와가슈(古今和歌集)’가나서(仮名序)의 주석에서 ‘야마토 노래’를 매우 평온하다고 해석한 예등을 확인할 수 있었고 근세에 와서 일본은 이러한 표현에 의해 ‘부드러운’말로 이야기하고, 평화롭고 온화한 기풍을 가진 나라로서 표현되었다는 다양한 예 또한 이러한 표현들이 때로는 호색문학의 소재로 이용된 예가 적지 않다는 것을 살펴 보았다.

오늘 논의에서도 나왔지만 호색의 정당화는 ‘겐지모노가타리(源氏物語)’와 ‘이세모노가타리(伊勢物語)’의 규범과도 밀접하게 관계되는 문제이며 언뜻 보기에는 그럴듯하다고 생각되는 논제일지도 모른다. 그러나 한편으로 근세 일본은 무가(武家)정권이 긴 세월 지배해 온 ‘무국(武国)’이라고 하는 인식이 있었던 것도 사실로, ‘야마토 정신’이라는 말이 근세 단계에서는 이미 당당함과 지지않으려는 강인함을 나타내는 말이 되었다는 점과 근대에 와서 더욱 과격한 의미를 내포하여 사용되었다는 점을 고려하면 ‘평온한 나라’라는 것은 잊혀진 하나의 아이덴티티 표현이라고 할 수 있지 않을까?

이번 발표에서 막부(幕府) 말기부터 메이지(明治)기에 걸쳐 이 표현이 어떻게 변했는지에 대해 모두 다룰 수는 없었지만 이것을 더 심화시켜서 알자스에서 보고하고자 한다.

【기사집필: 고바야시 후미코

(小林 ふみ子, 호세대학 커리어디자인학부 준교수)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立—日本民俗学・民族学の問題—」

第2回研究会

- 日 時：2010年9月25日(土)、26日(日) 10:00～18:00
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー25階
イノベーション・マネジメント研究所セミナー室
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼任所員、国際戦略機構特別教授）

第2回目の研究会は、去る9月25日(土)・26日(日)に開催された。

前回に引き続き、台湾、アメリカ、ドイツ及び日本国内から17名の研究者のご報告を頂いた。今回初めてスタンフォード大学のハルミ・ベフ先生とボン大学のH.D. オイルシュレーガー先生が出席した。おふたりには幅広く、また、普遍的なかたちで日本帝国時代における日本意識の意義(ベフ)及び民族学・文化人類学及び植民地主義のイデオロギーの実際を国際比較の観点からとりあげた(オイルシュレーガー)の二つの報告をふまえて、当時の日本の植民地であった朝鮮半島と台湾ならびに内南洋における日本の民族学及び民俗学の動き、就中、秋葉隆、泉靖一、台湾では、馬淵東一、金関丈夫、国分直一などの研究者の業績をとりあげる報告が続いた。歴史的・思想的背景については鶴見太郎先生と石井正己先生の報告、共同体論争とイエ制度については清水昭俊先生と桑山敬己先生のご報告があった。最後は、博物館とアイデンティティ

というテーマで近藤雅樹先生、そして、柳宗悦の民藝運動と諸国民藝とのかかわりについての松井健先生のとまとめがあった。非常に内容の濃い報告があり、次の段階、すなわち12月11日(土)12日(日)の国際シンポジウムのたたき台を創出することができた。研究会のまとめとして、国際シンポの来年度の研究テーマについての話し合いを持った。本年度は昭和10年代から昭和30年代をとりあげることとしていたが、実際、メンバーのご報告を振り返ってみると、戦後の動きをテーマに入れているのは川田先生と桑山先生のおふたりだけである。来年度は明治時代までさかのぼって討論するよりも、今年度のメンバーの報告をうけて、時代についてはオーバーラップしても、昭和20年から昭和40年頃までの研究の発展を討論したほうが良いのではないかという方向となった。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー

(法政大学国際日本学研究所兼任所員・国際戦略機構特別教授)】



研究会会場の様子1



研究会会場の様子2



初出席のハルミ・ベフ先生（スタンフォード大学名誉教授）



初出席の H.D. オイルシュレーガー准教授（ボン大学）

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities « Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies: 'Japan-consciousness' in the Past, Present and Future »
Approach 2 "Establishment of Modern 'Japan-consciousness': Issues of Folklore Studies and Ethnology"

2nd Research Meeting

Date: Saturday, 25 and Sunday, 26 September 2010, 10:00-18:00
Place: Hosei University Ichigaya Campus, Boissonade Tower 25F, Research Center for Innovation Management Seminar Room
Chair: Josef KREINER (Professor and Special Adviser, Hosei University Center for International Japanese Studies; Planning and Strategy Division)

The 2nd of the research meetings was held last year on Saturday, 25 and Sunday, 26 September.

Reports were given by 17 scholars from Taiwan, America, Germany and from within Japan. We welcomed Professors Harumi BEFU of Stanford University and H.D. ÖLSCHLEGER of Bonn University. Befu's presentation on the significance of Japan consciousness during the imperial era, and Ölschleger's view of the reality

behind ethno-anthropological and colonial ideology through an international comparison, were followed by reports on the research of Akiba Takashi and Izumi Seiichi etc. on movements in Japanese ethnology and folklore studies in the Japanese colonies of the Korean Peninsular, Taiwan and South Pacific, and of Mabuchi Toichi, Kanaseki Takeo and Kokubu Naoichi in Taiwan. Professors TSURUMI Taro and ISHII Masami provided historical/historical thought background, while reports by Professors SHIMIZU Akitoshi and KUWAYAMA Takami focused on communal controversy and the family system. To finish, Professor KONDO Masaki talked on the theme of museums and identity, and Professor MATSUI Takeshi, on Yanagi Soetsu's connection with the folk arts movement and worldwide folk arts. These meaningful presentations will provide a solid base for the 11-12 December international symposium. The meeting ended with discussion of themes for next year. As Professors Kawata and Kuwayama included postwar movements in the Showa 10-30s focus, we decided that next year would involve the same members and discuss the progress of research of Showa 20-40.

Report by: Josef KREINER (Professor and Special Adviser, Hosei University Center for International Japanese Studies; Planning and Strategy Division)

文部科学省私立大学戦略性研究基盤形成支援事業《基于国际日本学方法论的日本意识再探讨—日本意识的过去, 现在, 将来—》

研究课题 2 “近代日本意识的成立—有关日本民俗学・民族学的问题”

第2次研究会

日 期: 2010年9月25日(星期六), 26日(星期日) 10:00-18:00
会 场: 法政大学市谷校区BT25楼, 革新经营学研究所演习室
主持人: 约瑟夫 库拉伊纳(法政大学国际日本学研究所兼任研究员, 法政大学国际战略据点特聘教授)

本次研究会于9月25日, 26日召开。来自台湾, 美国, 德国, 日本国内的共计17名学者参加了本次大会并作了相关报告。其中, 斯坦福大学的哈尔米·贝福教授以及波恩大学的H.D.奥尔舒莱卡教授是首次出席。贝福教授对日帝时期的日本意识的意义进行了阐述, 而奥尔舒莱卡教授从国际比较学的观点剖析了民族学和殖民地主义的特征。除此以外, 围绕着日本的民族学和民俗学在日本殖民期间的朝鲜半岛和台湾呈现的动向, 共同体和家族制度的关系, 博物馆和民族的同一性, 柳宗悦的民族艺术运动等课题, 专家们都作了深入的讨论和报告。同时本次研究会为即将在12月11日(星期六), 12日(星期日)举行的国际学术大会作了很好的铺垫。

【执笔者: 约瑟夫 库拉伊纳
(法政大学国际日本学研究所兼任研究员・法政大学国际战略据点特聘教授)】

전략적 연구기반 형성 지원사업 《국제일본학 방법에 기초한 〈일본 의식〉 재검토—〈일본 의식〉의 현재・과거・미래》

연구② 근대 〈일본 의식〉의 성립 ‘일본민속학・민족학의 문제’

제2회 연구회

일 시: 2010년9월25일(토), 26일(일) 10:00 ~ 18:00
장 소: 호세대학 이치가야(市ヶ谷) 캠퍼스 보아소나드 타워25층 이노베이션매니지먼트연구소 세미나실
사 회: 요셉 클라이너(호세대학 국제일본학연구소 겸임 소원, 국제전략기구특별 교수)

제2회 연구회는 지난 9월25일(토) 과 26일(일)에 개최되었다.

지난 회에 이어 대만, 미국, 독일 및 일본 국내등 17명의 연구자의 보고가 있었다. 이번 회 처음으로 스탠퍼드대학의 할미 베후 선생님과 본(Bonn)대학 H.D.오일슈레거 선생님이 출석하셨다. 두 분께서는 폭넓고 보편적인 형식으로 일본제국시대의 일본 의식의 의의(베후) 및 민족학문화인류학 및 식민주주의의 이데올로기의 실재를 국제비교 관점에서 다룬(오일슈레거) 보고를 해주셨다. 이를 바탕으로 당시의 일본의 식민지였던 한반도와 대만 및 남양군도의 민족학 동향, 특히 아카바 다카시(秋葉隆), 이즈미 세이치(泉靖一), 대만에서는 마부치 도이치(馬淵東一), 가나세키 다케오(金関丈夫), 고쿠부 나오히(国分直一) 등의 연구자 업적을 다룬

보고가 이어졌다. 역사적, 사상사적 배경에 대해서는 쓰루미 타로(鶴見太郎) 선생님과 이시이 마사미(石井正己) 선생님께서, 공동체 논쟁과 이에(가족) 제도에 대해서는 시미즈 아키토시(清水昭俊) 선생님과 구와야마 다카미(桑山敬己) 선생님께서 보고해 주셨다. 마지막으로 박물관과 아이덴티티라는 테마로 곤도 마사키(近藤雅樹) 선생님, 그리고 야나기 무네키(柳宗悦) 선생님의 민예운동, 작지방 민예와의 관계에 대해서는 마츠이 다케시(松井健) 선생님이 정리해 주셨다. 매우 심도 있는 보고였기에 다음 단계, 즉 12월 11일(토), 12일(일) 심포지엄의 시안을 창출해 낼 수 있었다. 연구회 마지막으로 국제심포지엄의 내년도 연구 테마에 대해 의논하였다. 금년도는 쇼와(昭和) 10년대(1935~1944) 부터 쇼와(昭和) 30년대(1955~1964)를 다루기로 했지만 실제로 멤버의 보고를 뒤돌아보면 전후의 움직임을 테마로 한 보고는 가와다(川田) 선생님과 구와야마(桑山) 선생님 두 분이였다. 내년도에는 메이지(明治) 시대까지 거슬러 올라가 토론하기보다는 금년도 멤버의 보고를 받고, 시대가 겹쳐진다고 해도 쇼와(昭和) 20년(1945) 부터 40년(1965) 경까지의 연구발전을 토론하는 것이 좋겠다는 방향으로 의논을 마무리했다.

【기사집필: 요셉 클라이너
(호세대학 국제일본학연구소 겸임 소원・국제전략기구 특별교수)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2010 年度第 5 回東アジア文化研究会

「日中経済協力の過去・現在と将来」

- 日 時：2010 年 9 月 21 日（火）18：30～20：45
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 報告者：張 季風（中国社会科学院日本研究所経済研究室長、教授）
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

2010 年 9 月 21 日（火）、法政大学国際日本学研究所セミナー室において、法政大学国際日本学研究所 2010 年度第 5 回東アジア文化研究会が開催された。

今回は、中国社会科学院日本研究所経済研究室長、教授の張季風氏を迎え、「日中経済協力の過去・現在と将来」と題して行われた。

中国の国内総生産（GDP）が日本を抜いて世界第 2 位となり、日本の国債を大量に購入して日本にとって最大の債権国となるなど、2010 年の日中関係は、従来とは異なる様相を呈している。このような情勢を踏まえ、日中の経済関係の歴史的展開と現在のあり方を検討し、将来を展望するのが、今回の報告の目的である。報告の概要は以下のとおりである。

まず、1949 年の中華人民共和国建国から 1978 年の日中平和友好条約締結までの前期と、1979 年から現在に至るまでの後期とに分けて、日中の経済関係を概観された。

前期は、「民を以て官を促進する」ことを目指した 1950 年代、廖承志と高碕達之助が交わした覚書に基づく LT 貿易や覚書貿易（MT 貿易）が行われた 1960 年代を経て、1972 年の日中国交正常化によってそれまでの「民間交流」による経済協力は、「政府主導、民間並行」へと変化した。

一方、貿易額が前年を下回ったのが 1990、1998、2009 年の三回しかないことが示すように、後期の経済協力は、年を追って規模を拡大した。その結果、2007 年に中国は日本にとって最大の貿易相手国となり、2009 年には日本の最大の輸出相手国となった。日中相互の投資額については、1979 年に始まった日本の対中投資は 2009 年までに総件数 42401 件、累積投資額が 694.8 億ドルとなり、同じ年から行われている中国の対日投資は累積投資額が 6.7 億ドルとなった。金額のみを見れば中国の投資額は日本の 1%だが、2009 年になって日本企業に対する合併と買収の件数が増加するなど、「一方通行」の時代は終わりを迎えたといえる。政府間の資金協力については、日本の対中 ODA が中国の改革開放路線の実現に大きく寄与したこと、対中円借款が終了した後は、2.5 兆ドルの外貨準備のリスク分散の一環として中国が日本の国債を購入することで日本経済に資金提供をすることとなった。

日中経済の協力関係は、こうした相互補完性と互恵性を特徴とする。すなわち、資源、労働力、低賃金、人口ボーナス、潜在的な市場という中国の優位性と、資金力、技術力、ブランド力、経営にまつわる経験という日本の優位性とは、どちらの国にとっても不可欠な要素である。そして、そのような要素を活用することによって、両国が互いに利益を獲得する、「ウィンウィン関係」を構築することができる。また、市場の法則

と経営の理性とは政治問題と国民感情を超える役割を果たすことが可能となる。

しかし、日中の経済協力にも課題はある。例えば、両国の貿易の「ハイレベルな横ばい」や日中貿易における中国側の長期的な赤字体質、「食の問題」に象徴される貿易摩擦、中国における知的所有権の問題、日本市場の閉鎖的な傾向などが問題となる。このような課題を理解した上で、将来の日中の経済協力についての展望と提言はどうなるか。まず、「世界経済の回復」と「民主党政権による東アジア共同体構想」とが、日中の連携の促進につながるといえよう。「東アジア共同体」の中核は「日中共同体」になるため、日中間で経済貿易緊密化協定（CEPA）を締結して相互貿易の拡大、直接投資の拡大、大規模プロジェクトの遂行を実現することが必要となる。そして、日中省エネルギー環境保護基金を創設して政府主導による環境への投資の促進、日中エネルギー環境共同体を基礎として東アジアエネルギー共同体を形成し、自由貿易協定、共通通貨ユニット、共通通貨の導入、と段階的に日中を含む東アジア諸国の関係を発展させることも重要である。

以上の議論から、次のような結論が導かれた。

- ・日中の経済は順調に発展しており、潜在力も大きい。
- ・中国が GDP の額で日本を抜き、経済規模が第 2 位になったものの、一人当たりの GDP は日本の 1 割であり、日本なしで中国の経済を発展させることは難しい。
- ・「技術」、「ブランド」、「基準」という点では中国は日本に遠く及ばないため、日本にとっての中国は市場と生産拠点であり、中国にとっての日本は技術を吸収する手本として相互に補完し合う関係は続く。
- ・東アジア共同体という目標に向けて、日中の経済的な連携は、今後も穏健に発展する。
- ・日中省エネルギー環境保護基金を設立し、日中エネルギー環境共同体を形成することで、東アジア共同体を築くための基礎を作ることが重要となる。

質疑応答の中で出された、「経済は『神の見えざる手』に従って行動すべきであり、経済は常に経済以外の要素によって左右されるものである」という張氏の指摘は、1949 年以降の日中関係を振り返る際、なぜ「政経不分」とされた当初のあり方が、21 世紀になって「政冷経熱」という様相を呈したのかという問題の原因を考え、今後の日中の経済関係を展望する上で、示唆に富む意見といえるであろう。

【記事執筆：鈴木 裕輔

（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities « Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies: 'Japan-consciousness' in the Past, Present and Future »
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

5th East Asian Culture Research Meeting of 2010

“The Past, Present and Future of Japan-China Economic Cooperation”

Presenter: ZHANG Jifeng (Professor and Head, Institute of Japanese Studies, Chinese Academy of Social Sciences)

Date: Tuesday, 21 September 2010, 18:30-20:45

Location: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Center for International Japanese Studies)

The topic on this occasion which welcomed Zhang Jifeng, Professor and Head of Institute of Japanese Studies, Chinese Academy of Social Sciences, was “The

Past, Present and Future of Japan-China Economic Cooperation”. The aim of the presentation was to predict the future of Japan-China economic relations by examining their historical development and present state.

Japan-China economic cooperative relations are characterized by their mutual complementarity and reciprocity. That is to say, the advantages of China's resources, workforce, low wages, population bonus, stagnant market, and the advantages of Japan's capital, technology, brands and business experience, are essential elements for both countries. And making use of those elements creates a “win-win relationship” by which both countries reap mutual benefits. Also, market rules and business ideals can play roles that overcome political issues and national sentiment.

The above discussion concluded that, as well as encouraging economic cooperation, the establishment of the Japan-China Energy and Environment Conservation Foundation to form a Japan-China community for energy and the environment would become important in building the base of an East Asian community.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Researcher, Hosei University Center for International Japanese Studies)

文部科学省私立大学戦略性研究基盤形成支援事業《基于国际日本学方法论的日本意识再探讨—日本意识的过去，现在，将来—》

研究课题3 “日本意识的现在—从东亚出发”

2010年度 第五次东亚文化研究会

“日中经济合作的过去，现在与未来”

报告者：张 季风（中国社会科学院日本研究所经济研究室室长・教授）

日 期：2010年9月21日（星期二）18:30-20:45

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2楼 国际日本学研究所演习室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

本次报告的目的在于探讨日中经济关系的历史发展，现今状况以及展望未来。互补与互惠是日中经济合作的重要特点。具体来说，中国的优势在于资源，廉价劳动力，市场潜力，日本的优势在于资金，技术，品牌以及营销经验。日中两国通过整合各自的优势项目从而达到“双赢”的局面。另外，市场法则与经营理念亦能起到克服政治以及国民感情等敏感问题的作用。

为促进日中经济合作，日中两国共同设立了节能环保基金。日中能源环境共同体的建立为东亚共同体的构建奠定了重要的基础。

【执笔者：铃村 裕辅（法政大学国际日本学研究所客座研究员）】

전략적 연구기반 형성 지원사업《국제일본학 방법에 기초한〈일본 의식〉재검토—〈일본 의식〉의 과거・현재・미래》
연구③〈일본 의식〉의 현재—동아시아를 기점으로

2010년도 제5회 동아시아 문화연구회

일・중 경제협력의 과거와 현재 그리고 미래

보고자：장 지평(張 季風)(중국사회과학연구원 일본연구소경제연구실장・교수)

일 시：2010년9월21일(화) 18:30 ~ 20:45

장 소：호세대학 이치가야(市ヶ谷) 캠퍼스58년관2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회：왕 민(王 敏, 호세대학 국제일본학연구소 교수)

이번에는 중국사회과학원 일본연구소 경제연구실장 겸 교수인 장 지평(張 季風) 씨를 맞이하여 ‘일・중경제협력의 과거와 현재 그리고 미래’라는 제목으로 연구회를 개최했다. 이번 보고의 목적은 일・중 경제관계의 역사적 전

개와 현재의 모습을 검토하고 미래를 전망하는데 있다.

일・중 경제협력관계는 상호보완성과 호혜성을 특징으로 한다. 즉, 자원, 노동력, 저임금, 인구보너스, 잠재적인 시장이라는 중국의 경쟁력과 자금력, 기술력, 브랜드력, 경영 경험을 보유한 일본의 경쟁력은 두 나라에 있어서 불가결한 요소이다. 그리고 이러한 요소를 활용함으로써 양국이 서로 이익을 획득하는 ‘상호 이익 관계’를 구축할 수 있다. 또한 시장의 법칙과 경영의 이성은 정치문제와 국민감정을 초월하는 역할을 할 수 있다.

위와 같은 논의에서는 경제협력 촉진과 함께 일・중 에너지절약 환경보호기금을 설립하고 일・중 에너지환경공동체를 형성함으로써 동아시아 공동체 구축의 기초를 다지는 것이 중요하다는 결론이 도출되었다.

【기사집필：스즈무라 유스케

(鈴村 裕輔, 호세대학 국제일본학연구소 객원학술연구원)】



張 季風 教授



王 敏 教授



会場の様子

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2010 年度第 6 回東アジア文化研究会

「自由」はいかにして東アジアへ伝えられたか —洋学に転じた漢学者 中村正直

● 報告者：平川 祐弘（東京大学名誉教授）

● 日 時：2010 年 10 月 5 日（火）18：30 ～ 20：30

● 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

日本と中国との比較近代化論の上で興味深いのは、日本で強烈なインパクトを与えた西洋からの最初の翻訳が中村正直（1832－1891）の手になる『西国立志編』（1871）であったのに対して清末の中国で強烈なインパクトを与えた西洋の最初の翻訳がオルダス・ハクスリー・赫胥黎の厳復（1853－1921）による *Evolution and Ethics* の翻訳『天演論』（1898）だったということであろう。厳復は中村より 21 歳年下で、イギリスへ留学したのは中村より 9 年後の 1877 年、『天演論』は『西国立志編』より 27 年遅く 1898 年（光緒 24 年）に出た。日清戦争で清国の国民に危機意識が生じて外国のことを知ろうとした。そのときにハクスリーの書物に示された社会進化論、ソーシャル・ダーウィニズムが中国では西洋列強の強引な帝国主義的進出を解き明かすものとして読まれたということであろう。

『西国立志編』と『天演論』二つの書物を要約する言葉は「天ハ自ラ助クルモノヲ助ク」Heaven helps those who help themselves と「物競ヒ天択ブ、適スル者ノミ生存ス」survival for the fittest の二つである。『西国立志編』は自由競争の資本主義社会で生きるための訓えで『天演論』は帝国主義の優勝劣敗、弱肉強食の競争原理の訓えでもある。しかしこの二冊には決定的な違いがある。『西国立志編』には産業国家建設の見取図が示されていたが、『天演論』には清末中国の危機的状況を自覚させる分析は示されていたが、近代国家建設の処方箋は示されていないということで、それは中国にとっての不幸せであったといわねばならない。

さらに興味深いことは、中村も厳復もともに同じ John Stuart Mill, *On Liberty* を訳しているが、両国におけるその受容がはなはだ異なっていることである。最近區建英が『自由と国民 厳復の模索』という書物を東京大学出版会から出したが、中村と厳復についての比較はなされていない。私見では次のような並行例と相違例をあげることができる。

中村正直と厳復の二人はともに日中の最初期の英国留学生であった。中村と厳復は当時の世界の最強国の実例に接したことで、自国を西洋化という近代化する必要を感じた。

中村も厳復も西洋の学問を学んだことで、帰国後、民智を啓き、国に富強をもたらす方策を考え、その一助として 19 世紀英国思想家の著書をそれぞれ翻訳して啓蒙の資とした。

中村も厳復もミルの *On Liberty* を中村は『自由之理』の名で 1872 年に日本語へ、一人は『羣己権界論』の名で 1903 年に中国語に訳した。そこまでは並行例が成り立つ。しかし翻訳の刊行が中国では 31 年遅れただけでなく、日本では『自由之理』は広く読まれ、

明治 22 年の立憲君主制を定めた大日本帝国憲法の成立にも影響を与えたが、『羣己権界論』はそうした影響力はもち得なかったということである。

ミルの句で印象的な言葉としては、6 歳年長のミルを尊敬していたスマイルズが『西国立志編』の巻頭に引いた「一国ノ貴トマルトコロノ位価ハ、ソノ人民ノ貴トマルルモノノ、合併シタル位価ナリ」がある。原文は The worth of a State, in the long run, is the worth of the individuals composing it. があげられる。「一国の価値は、長い目で見れば、一国を構成する個々人の価値の総体である」という意味である。昔から東アジアには国家の価値は重く見ても、それを構成する個々の人間の価値を重んじない国家指導者が多かった。孔子の時代から中国共産党が支配する今日まで、中国の政治の要諦は「民可使由之、不可使知之」「民ハ由ラシムベシ、知ラシムベカラズ」である。その民度の実態を知る人の耳にはミルの句は痛い。しかし民主主義国の政治の要諦は、「民ハ知ラシムベシ、由ラシムベカラズ」である。そんなミルの主張を中村はこういう言い方で伝えた、「国ニ自主ノ権有ル所以ノモノハ、人民ニ自主ノ権有ルニ由ル。人民ニ自主ノ権有ル所以ノモノハ、ソノ自主ノ志行有ルニ由ル」。自主の志行ある人こそが自助の人である。そのようなイニシアティブに富む、価値ある個人が数多く出てこそ、自主自立の日本ともなりうる。

中村はそう主張したばかりではない。1868 年、明治元年に帰国した直後に執筆した『諸論』で、ミルの立憲君主制の考えを次々と具体例を引いて述べた。日本人は鴉片戦争における英国の勝利を英国には英邁な君主がいて良き臣が補佐しているからだと思っているが、西洋の実情はそうではない。「西国ノ君、大イニソノ智ヲ用フレバ、スナハチソノ国大イニ乱ル」という東洋人にとっては耳馴れない説を述べた。それはお上をないがしろにする不敬な発言にさえ聞こえる。しかしこれは逆説ではない。これこそがミルの『自由論』の考えなのである。中村は西ヨーロッパでは君主の権に限界が定められている実状を『諸論』の中で説明した。立憲君主は専制君主でなく、己の恣意では何事も決定しえず、法律に従い、議会の多数の意思を尊重し、内閣の意向に耳を傾けなければならない。

ミルが説いた liberty とは人間の自由意志を問題とする際の哲学的自由ではなく、市民的自由である。いいかえると、政治や社会という群によって個人、即ち己に対して合法的に行使される得る力の限界を論じたものである。それだからこそ厳復は翻訳に『羣己権界論』という題を訳につけたのだ。

中村正直は 1871 年明治 4 年には *On Liberty* を『自由之理』と訳すことで「自由」の言葉に西洋語の

liberty の意味を吹き込み、日本語として定着させることに成功したが、厳復は同じ言葉を中国語で「自繇」の字をあてて訳した。発音は自由と同じ ziyóu と読むが、この厳復が訳として選んだ「自繇」の語が中国に定着しなかったのは中国における政治的自由、市民的自由の運命を暗示していると思われる。ミルにとって自由 liberty とは「君主ノ暴虐ヲ防グ保障」であ

る。そのミルの自由の思想は英語でいうと By Liberty, is meant protection against tyranny of the political leaders. 「自由トハ、政治支配者ノ暴虐カラノ心身ノ安全保護ヲ意味スル」。毛沢東の人民中国に無かったもの、それはこの「自由」であった。

【記事執筆：平川 祐弘（東京大学名誉教授）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities « Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies: 'Japan-consciousness' in the Past, Present and Future »
Research Approach 3 «Present-day 'Japan-consciousness': in East Asia»

6th East Asian Culture Research Meeting of 2010 “How was ‘Liberty’ introduced to East Asia? Nakamura Masanao’s Switch to Western Studies”

Presenter: HIRAKAWA Sukehiro (Emeritus Professor, University of Tokyo)

Date: Tuesday, 5 October 2010, 18:30-20:30

Location: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Center for International Japanese Studies)

The twentieth century was “the century of revolution” for China, however the twenty-first century might well become “the century of liberty”. Scholar of Chinese studies, Nakamura Masanao, who turned to Western studies, brought over from Great Britain Smiles’ *Self Help* as well as J.S Mill’s *On Liberty*. I trace the fate of the ideology behind “liberty” in East Asia.

Report by: HIRAKAWA Sukehiro (Emeritus Professor, University of Tokyo)

文部科学省私立大学戦略性研究基盤形成支援事業《基于国际日本学方法论的日本意识再探讨—日本意识的过去，现在，将来—》

研究課題 3 “日本意识的现在—从东亚出发”

2010 年度 第六次东亚文化研究会

“‘自由’是如何在东亚传播的？ —以洋学家中村正直为例”

報告者：平川 祐弘（東京大学名誉教授）

日 期：2010年10月5日（星期二）18:30-20:30

会 場：法政大学市谷校区 58年館2楼 国際日本学研究所演習室

主持人：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

二十世纪对于中国来说是“革命之世纪”，而二十一世纪对于中国来说可谓是“自由之世纪”。向西洋学转型的汉学家中村正直（1832-1891）从英国引进了Smiles: *Self-Help*の《自助論》一书与J.S.Millの《自由之理》一书。“自由”这一思想在亚洲到底会历经怎样的命运，我们拭目以待。

【执笔者：平川 祐弘（東京大学名誉教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 《국제일본학 방법에 기초한 <일본 의식> 재검토—<일본 의식>의 과거·현재·미래》

연구③ <일본 의식>의 현재—동아시아를 기점으로

2010 년도 제 6 회 동아시아연구회

‘자유’는 어떻게 동아시아에 전해졌는가 — 양학으로 전향한 나카무라 마사나오 (中村正直)

보고자: 히라카와 스케히로 (平川 祐弘, 도쿄대학 명예 교수)

일 시: 2010년10월5일 (월) 18:30 ~ 20:30

장 소: 호세대학 이치가야 (市ヶ谷) 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민 (王 敏, 호세대학 국제일본학연구소 교수)

20세기의 중국은 ‘혁명의 세기’였지만 21세기는 ‘자유’의 세기’가 될 것이다. 양학으로 전향한 한학자 나카무라 마사나오 (中村正直, 1832-1891)는 영국의 Smiles의 저서 ‘자조론 (自助論)’과 J.S.Mill의 ‘자유지리 (自由之理)’를 소개했다. 동아시아에서의 ‘자유’사상의 운명에 대해 연구하고자 한다.

【기사집필: 히라카와 스케히로

(平川 祐弘, 도쿄대학 명예교수)】



平川 祐弘 先生 (東京大学名誉教授)



王 敏 教授



会場の様子

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2010 年度第 7 回東アジア文化研究会

「東アジアから見た朱舜水—文明発展の役割とそのアイデンティティー」

● 報告者：徐 興慶（台湾大学日本語文学研究所教授兼所長）

● 日 時：2010 年 10 月 26 日（火）18：30～20：30

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

一、注目される朱舜水研究

17 世紀の初期から西洋の大国、特に造船、航海技術がより進んだイギリスやオランダの勢力は東アジアの世界へ進出した。徳川幕府は西洋の侵入を恐れて、徐々にキリスト教の禁止や鎖国の政策を取るようになった。1853 年に米国の黒船が浦賀港への来航によって、日本は近代化への道を促された。

一方、同じ時期の中国では、北方の満族が築いた清王朝が中国を統治するようになった。この「明清交替」という乱れた戦乱社会では、中国の知識人たちが長崎に渡航する風潮が見られ、徳川鎖国時代の日中文化交流は空前の発展を遂げた。浙江餘姚出身の朱舜水（1600－1682）は、この時代背景の中に日本を渡航し、徳川社会、特に水戸藩や加賀藩の儒学を普及し、日中文化交流に献身的な役割を果たした。江戸初期に長崎来航の明朝文化人は国家に対するアイデンティティーが強く、彼らは漢民族の誇りを持ち、満清族と対抗し続けた知識人なのである。本講演の焦点は（一）「日本乞師」活動をめぐる朱舜水のアイデンティティー、（二）経世致用の実学理論を広げ、「前期水戸学」に深い影響を与えた朱舜水の東アジア文明発展の役割を論述する。

二、「日本乞師」活動をめぐる朱舜水のアイデンティティー

朱舜水は 17 年間「海外経営」の間に 7 回も長崎に渡航したことが最も注目されている。なぜ彼は頻繁に長崎に渡航したか、さまざまな推測はあるが、軍事的物資の調達を目的とした三角貿易を営んだと考えられる。『朱舜水全集』によると、彼は舟山群島、ベトナム、長崎を往来していた期間、ずっと満清政権に対する抵抗運動を行っていたことは紛れもない事実である。また、日本居留の目的について、朱舜水は「儒教を唱えるために日本に来たわけではない」というように、来航の目的は儒教の普及ではないと言明している。つまり、朱舜水は賓師として徳川光圀（1628－1700）に招聘され、儒学を伝授しながら、実学思想を普及し、幕末の思想界にまで影響のある「舜水学」を花開したことは、全て予定外の結果といってもよい。

朱舜水は長崎に居住した約 6 年の間、福岡柳川藩の儒臣安東省庵（1622－1701）との交友が最も深かった。

九州歴史資料館柳川古文書館に所蔵する安東省庵宛ての朱舜水書簡の内容によると、朱舜水は明朝復興を図るため、日本の兵力を借りたい（乞師）願望をしばしば打ち明けている。南明政権（鄭氏一族）が徳川幕府に援助を求めたのは、朱舜水が長崎に移り住む以前のことなので、朱舜水の「日本乞師」は決して新しい発想ではない。しかし、彼は国家に忠節を尽し、大義名分を重んじる正義の士であって、満族の統治を受け入れることができず、「日本乞師」の一員になったのである。

この南明政権と朱舜水による一連の「日本乞師」行為は、鎖国体制下の徳川幕府の上層部を震撼させた。つまり、十七世紀中期の東アジアに生じた「明清交替」、「華夷変態」といった中華社会における秩序の再形成をめぐる政治の動きが日本側に波紋を及ぼした。

三、東アジア文明発展の役割を果たす朱舜水

朱舜水は「聖学の道」を語る際、二つの焦点にある。まず、聖学の道を普及すれば、功利、私慾ないし儒学各派の争い現象を切り抜けられ、禮、義、廉、恥の風習に変貌することができるという。次に聖学の道とは、誰もが知（自覚）と行（行動）ができることを望み、言行一致の誠実な社会に達せるものとして目指している。言い換えれば、朱舜水がいう「聖学の道」は、修身を元にし、伝統を継承することもあれば、自分の思考で見極めていくものもあると、日本の儒教界に呼びかけようとした。

東アジア文化圏における明末清初と徳川初期の儒学世界の変遷を視野に入れる場合、朱舜水が主張する「民本政治を以て、理想な社会を造る」、「道徳を実践することによって、齊家、治国、平天下など社会的役割を果たすこと」、「虚と実を弁明した上、政治そして天下国家に有益の行為をとること」、「人倫、道徳政治を重んじ、実践を徹底的にすること」などの「経世致用」の学問は、江戸初期の儒学者に共感を得た側面がうかがえる。同時に実用主義そのものを如何に徳川社会に生かせるのかが喚起されるものであった。朱舜水は文化伝播者として、如何に文明発展の役割を果たすか、本講演でその意義を語った。

【記事執筆：徐 興慶（台湾大学日本語文学研究所教授兼所長）】



徐 興慶 教授



王 敏 教授



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities « Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies: 'Japan-consciousness' in the Past, Present and Future »
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

7th East Asian Culture Research Meeting of 2010

“ZHU Shun Shui within East Asia: Role in Development of Civilizations and his Identity”

Presenter: SHYU Shing-ching (Professor and Head, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University)

Date: Tuesday, 26 October 2010, 18:30-20:30

Location: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Center for International Japanese Studies)

This talk focused on 1) the identity of Zhu Shunshui as activist for “Nihon kisshi” (call to Japan for reinforcements), and 2) “Keisei chiyo” realism theory and discussed

Zhu Shunshui's role in the development of East Asian civilization, having deeply influenced the Early Mito School.

Zhu Shunshui sailed to Nagasaki frequently in a trade triangle aimed at providing military goods. Whilst travelling between the Zhoushan Archipelago, Vietnam and Nagasaki, he carried out anti-Manchu Qing Government movements. The act of Nihon kisshi by Zhu Shunshui and the Southern Ming Government shook upper levels of the Tokugawa Shogunate. In other words, political movements occurring in mid-17th century East Asia relating to the reconstruction of order in Chinese society, namely the Ming-Qing Dynasty switch and foreign eradication, also had an effect upon Japan.

Among the changes happening in the Confucian world of Late Ming/Early Qing and the Early Tokugawa, we see Zhu Shunshui's advocacy of “Keisei chiyo” studies receiving empathy from Early Edo Confucianists. It is intriguing that pragmatism emerged at this time in Tokugawa society. This presentation showed how Zhu Shunshui fulfilled his role as cultural transmitter in developing civilization.

Report by: SHYU Shing-ching (Professor and Head, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University)

文部科学省私立大学戦略性研究基盤形成支援事業《基于国际日本学方法论的日本意识再探讨—日本意识的过去，现在，将来—》

研究课题 3 “日本意识的现在—从东亚出发”

“从东亚看朱舜水对文明发展的贡献以及国家认同”

报告者：徐 兴庆(台湾大学日语文学研究所教授兼所长)

日 期：2010年10月26日(星期二) 18:30-20:30

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2楼 国际日本学研究所演習室

主持人：王 敏(法政大学国际日本学研究所教授)

從東亞看朱舜水對文明發展的貢獻及其國家認同
徐 興慶(臺灣大學)

本演講的內容主要有兩個重點：(一) 朱舜水的「日本乞師」活動與國家認同問題；(二) 普及經世致用的實學理論，對「前期水戶學」影響深遠的朱舜水對東亞文明發展所扮演的角色。

朱舜水長達十七年「海外經營」期間，曾經渡航日本

長崎七次，他頻繁往來長崎，有諸多推論，一般認為是為了籌措軍事物資而經營三角貿易。根據《朱舜水全集》的相關記載，也可證明朱舜水往來舟山群島、越南、長崎是為了抵抗滿清政權，此亦為不爭的事實。南明政權與朱舜水接二連三的「日本乞師」活動，震撼了鎖國體制下的德川幕府高層，亦即十七世紀中期，東亞發生的「明清交替」、「華夷變態」，對中華社會秩序重整的政治活動波及了日本。

若將明末清初與德川初期儒學世界的發展，納入東亞文化圈的視野來思考，可窺知朱舜水主張的「經世致用」學問，已經獲得德川初期日本儒學界的共鳴，喚起我們重視實用主義的內涵如何在德川社會發展的問題。身為文化傳播者的朱舜水對東亞文明發展有何貢獻，本講演陳述其歷史性的意義。

【执笔者：徐 兴庆(台湾大学日语文学研究所教授兼所长)】

<附记>

报告内容的中文翻译要由徐兴庆教授担当，使用的汉字体为台湾字体。

전략적 연구기반 형성 지원사업 《국제일본학 방법에 기초한 〈일본 의식〉 재검토—〈일본 의식〉의 과거·현재·미래〉 연구③ 〈일본 의식〉의 현재—동아시아를 기점으로

2010년도 제 7 회 동아시아 문화연구회

동아시아에서 본 주순수(朱舜水)

—문명발전의 역할과 그 아이덴티티

보고자: 쉬 싱칭(徐 興慶, 대만대학 일본문학연구소 교수겸 소장)

일 시: 2010년10월26일(월) 18:30 ~ 20:30

장 소: 호세대학 이치가야(市ヶ谷) 캠퍼스 58년관 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민(王 敏, 호세대학 국제일본학연구소 교수)

이번 강연의 초점은 (1) 「일본을사(日本乞師)」 활동을 둘러싼 주 순수(朱 舜水)의 아이덴티티 (2) 경세치용의 실용이론을 넓히고 「전기 미토학(前期水戸學)」에 깊은 영향을 끼친 주 순수의 동아시아 문명발전의 역할을 논술한다.

주 순수는 17년간 「해외경영」을 하던 중에 7차례나 나가사키(長崎)로 도항한 사실이 가장 주목받고 있다. 왜 그는 빈번하게 나가사키에 도항했는지 여러 가지 추

측이 있지만 군사적 물자조달을 목적으로 한 삼각무역을 경영했다고 생각된다. 「주순수전집」에는 그가 저우산군도, 베트남, 나가사키를 왕래하던 기간 중 계속해서 만청(滿淸) 정권에 대한 저항운동을 했다는 사실이 명백히 드러나 있다. 남명(南明) 정권과 주순수에 의한 일련의 「일본을사」 행위는 쇄국체제였던 도쿠가와(德川) 막부의 상층부를 뒤흔들었다. 즉 17세기 중기에 동아시아에서 일어난 「명청교체(明清交替)」, 「화이변태(華夷變態)」 등의 중화사회 질서 재구성을 둘러싼 정치적 움직임은 일본 측에 파문을 불러 일으켰다.

동아시아문화권에서 명말청초(明末清初)와 도쿠가와 초기의 유교세계의 변천을 감안하면 주 순수가 주장하는 「경세치용」의 학문은 에도(江戸) 초기의 유학자들에게 공감을 얻었다고 볼 수 있다. 동시에 실용주의 그 자체를 어떻게 도쿠가와 사회에 활용할 수 있을지가 관심의 대상이었다. 본 강연에서는 주 순수가 문명발전과 자로서 어떤 방법으로 문명발전의 역할을 다했는지 그 의의를 논하였다.

【기사집필: 쉬 싱칭

(徐 興慶, 대만대학 일본문학연구소 교수겸 소장)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2010 年度第 8 回東アジア文化研究会

「日韓和解のための課題—韓国の日本認識を通して」

● 報告者：朴 裕河（韓国 世宗大学人文科学大学教授）

● 日 時：2010 年 11 月 12 日（金）18：30～20：30

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

現在の韓国の日本認識は、2010 年の各種アンケートだと、全体として好意的になっていながらも（過去の歴史に対して）「謝罪しない日本」というものが代表的なものとなっている。しかし、「謝罪していない」という認識では共通していながらも、日本に対する「姿勢」は進歩か保守かの政治的立場によって大きく違っている。たとえば李明博（イ・ミョンバク）大統領が就任直後に日本と「未来志向の関係を築いてゆく」と明言し、マスコミ・市民の大半からは反発を受けたこともそれを表している。さらに、たとえば 2007 年 1 月にあった、引揚げの際の悲惨さと被害を描いた在米日本人による小説「ヨウコ物語」に対しての非難と販売中止、2008 年 5 月に試みられた日本人による「朝鮮人特攻隊慰霊碑」の韓国内設置に対する激しい反対、さらに 2009 年の夏、駐韓日本大使に対する投石事件などにかかわる人々が主に進歩側の人々だったことにもこうしたことは現れている。

保守側の立場は、「市場主義」と「自由民主主義」を共有する政治体制を重要視し、日本との政治・経済的協力を強調している。彼らは主に反共主義で「安保」をかかげて日本やアメリカとの協調を導いている。このような思考は、発展至上主義的近代主義と国家主義をはらんでいて、それゆえに植民地時代の日本の役割も肯定的に評価する傾向にある。その点で、日本の右派と共通した思考の枠組みを持っているが、時折日本を批判する際はそのような立場は忘却されるか隠蔽される。

進歩側の立場は、政府に対して反体制的で北朝鮮に対してはわりあい穏健な態度を保ち、強い民族主義的情緒を持っている。立場としては「反近代」「反国家」であるが、盧武鉉（ノ・ムヒョン）政権の時あきらかになったように、そのような姿勢が徹底されることもない。植民地時代に関しては「被害者」の認識に徹底していて、90 年代に行われた日本の補償に対しても否定的である。「謝罪していない日本」という思考の中心を担っているが、階級や性差によって違った位置に立たされた植民地時代の矛盾に対しての自覚が十分とは言えない。

このように、日本をめぐる韓国の認識と対立には、左右の対立のみならず、左・左の対立やジェンダーの問題もからんでいるが、日本との葛藤は韓国が「弱い」ゆえのこととみなす「弱い韓国」観では一致しており、必然的に「強い韓国」を求めるような国家主義、近代

的發展主義に行くほかないという点では共通している。日本に対する韓国の批判には、左右の立場による認識の差異やそれに基づく入り組んだ構造があるのであって、単に「ナショナリズム」とする理解はこうした対立の構造を見ることを難しくし、解決の道も見出せないだろう。

そして、このような韓国内部の対立する動きは日本内部の左右とそれぞれ連携するような時代に来ていて、「冷戦」を別の形で存続させ続けている。

日本では、右派は 90 年代後半から「歴史問題」に対して積極的に発言し始めたが、これは冷戦終焉後のナショナリズムといった世界的情勢のみならず、国家単位の冷戦が終息するにしたがって内部冷戦が顕在化したものと見るべきである。そのような動きは現在の『嫌韓流』につながるような対韓認識で韓国の反発を呼んだ。一方、中途的な官僚や市民は、併合に対して「不当」との認識を持ちながらも「合法」、1965 年に清算は終わった、1990 年代においてさらに再清算をした、独島（竹島）は日本の領土、などの認識を共有している。支配に対して反省的だが、現実認識では右派と多くを共有していて、90 年代以降の韓国との、補償をめぐる関係において疲れを感じていて、新たな補償には消極的である。さらに、革新側は、新たな「国家」補償をするべきとしているが、90 年代の補償についての理解は十分ではなく、厳しい自己評価に基づいて韓国の左派市民団体と密に連携している。植民地時代や解放後韓国社会に対する理解もやや平板で、歴史問題に対する反省的な立場は高く評価できても、右翼の反発や強硬な姿勢を維持させる原因のひとつにもなっていて、かえって政府を動かせない困った事態になっている。

このような膠着した事態を転換させるためには、過去に対するより複合的な理解—帝国の入り組んだ構造、植民地のみならず解放後の韓国・北朝鮮の政治状況、戦後日本や現在の日本に対する理解—を持ち、その認識を共有してゆく必要がある。国民主義ではなく市民主義、一国主義ではなく地域平和主義に基づいて左右の認識の接点を見出していくことが必要で、そのことこそが国家補償を可能にし、最終的に日韓の和解のみならずそれぞれの内部冷戦も治癒していけるはずである。

【記事執筆：朴 裕河（韓国 世宗大学人文科学大学教授）】

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities « Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies: 'Japan-consciousness' in the Past, Present and Future »
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

8th East Asian Culture Research Meeting of 2010

“Towards Japan-Korea Reconciliation: through Korean Recognition of Japan”

Presenter: PARK Yu Ha (Professor, Sejong University College of Liberal Arts, Korea)

Date: Friday, 12 November 2010, 18:30-20:00

Location: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Center for International Japanese Studies)

The most common recognition of Japan in Korea is of “unapologetic Japan” (regarding its colonial rule). This state of affairs comes from Japan’s handling of the issue,

but the cause also lies in Korea’s lack of understanding of Japan’s compensation since the 90s. There is a tendency for recognition of Japan to differ in political circles, and it is insufficient to consider Korea’s criticism of Japan as simply “nationalism”. The conservatives continue to hold aloft the US-Japan Security Treaty and maintain the Cold War structure, while the progressives’ rather flat understanding of the colonial era and postwar compensation is enough to invite protest from the Japanese right wing. In order to break through this situation new laws are necessary to facilitate change in right-wing thinking. Only this will make possible state compensation. Rooting out and confronting the contradictions on both Japanese and Korean sides regarding the colonial era and postwar (post-emancipation) is necessary not just for Japan-Korea reconciliation, but also for curing cold war-like circumstances inside both Japan and Korea. Only then will we be able to overcome the defeat inherited from the 20th century.

Report by: PARK Yu Ha (Professor, Sejong University College of Liberal Arts, Korea)

文部科学省私立大学戦略性研究基盤形成支援事業《基于国际日本学方法论的日本意识再探讨—日本意识的过去，现在，将来—》

研究課題 3 “日本意识的现在—从东亚出发”

“日韩和解的课题—以韩国的日本认识为切入点”

報告者：朴 裕河（韩国 世宗大学人文科学大学教授）

日 期：2010年11月12日（星期五）18:30～20:00

会 場：法政大学市谷校区 58年馆2楼 国际日本学研究所演習室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

日本尚未对殖民地统治进行道歉，是韩国人认识日

本的一个代表性的观点。形成这种观点的原因不仅在于日本对战后问题的处理方式上，也在于韩国人并没有完全理解九十年代后日本所付出的补偿行为。对于日本的认识因政治立场不同而各有千秋，而我们不能将韩国对于日本的批判单纯地理解为“国家主义”。保守派高举“安保”的大旗主张维持冷战体系，而进步派对于日本战后做的补偿并不认可，从而激发了日本右翼的反感。为解决这一课题，进步派的思考方式同样需要做出改变。通过寻求日韩两国对于殖民期以及战后处理问题的分歧点和共同点，不仅有助于日韩两国的和解，而且可以调和日韩两国内部的矛盾和分歧。只有这样，我们才能克服上世纪的遗留下来的负面因素。

【执笔者：朴 裕河（韩国 世宗大学人文科学大学教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업《국제일본학 방법에 기초한〈일본 의식〉 재검토—〈일본 의식〉의 과거·현재·미래〉
연구③〈일본 의식〉의 현재—동아시아를 기점으로

2010년도 제8회 동아시아 문화연구회

한일화해를 위한 과제—한국의 일본 의식을 통하여

보고자：박 유하（한국 세종대학 인문과학대학 교수）

일 시：2010년11월12일（금）18:30～20:00

장 소：호세대학 이치가야（市ヶ谷）캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회：왕 민（王 敏，호세대학 국제일본학연구소 교수）

한국의 일본인식을 대표하는 것은 ‘사죄하지 않는 일본’이다. 이러한 사태는 일본의 문제처리 방식에서도 연유하지만 90년대 이후의 일본의 전후보상에 대한 한국의 이해가 불충분한 점에서도 연유한다. 일본에 관한

인식은 정치적 입장에 따라 달라지는 측면도 있어, 그런 의미에서는 일본에 대한 한국의 비판을 단순히 <민족주의>로 이해하는 것은 불충분하다. 보수측 사고는 <안보>를 내걸고 냉전구조를 유지시키고 있고 진보측 사고는 식민지시대와 전후 일본, 한국에 대한 일면적 이해로 인해 오히려 일본우익의 반발을 부르는 측면이 있다. 이러한 사태를 타개하기 위해서는 일본우익의 사고를 수정 가능한 새로운 이해틀이 필요하며 그러한 작업만이 일본의 국가보상을 가능케 할 것이다. 식민지 시대나 냉전후（해방후）에 대한 한일/좌우의 모순을 직시하고 점점을 찾아가는 일은 한일간의 화해뿐 아니라 한일양국의 내부냉전적인 상황을 치유해나가기 위해서도 필요한 일이며, 이는 20세기가 남긴 부정적 유산을 극복해나가는 작업이 될 수 있다.

【기사 집필：박 유하（한국 세종대학 인문과학대학 교수）】



王 敏 教授（左：司会）、
朴 裕河 教授（右：発表）



朴 裕河 教授



会場の様子

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

2010 年度第 9 回東アジア文化研究会

「忘れられた近代インドと日本の交流」

● 報告者：ブリジ・タンカ（インド デリー大学東アジア研究科教授）

● 日 時：2010 年 12 月 8 日（水）18：30～20：30

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

19 世紀末、世紀が変わろうとするころ、人気雑誌『探検世界』は、探検と冒険についての特集を組んだ。そこには、虎狩り、異習、三ツ目人種の国というような、奇怪で異国的なものについての読み物が収録された一方で、数世紀にわたる鎖国のあとに眼前に開かれた世界に関する記事も含まれていた。もちろん、徳川時代の防壁の隙間から情報が入り込むことはあっただろうが、学者や学生そして多数の一般の人々が海外に旅行し世界を直接経験するようになったのは、やっと明治維新後のことだったのである。徳富蘇峰は、1950 年代に書いた大谷光瑞についての著書において、その探検精神を讃えている。大谷光瑞は、西本願寺の法主にして、中央アジア探検において大きな役割を演じた人物である。徳富は、大谷をこうして讃える一方で、このような大胆な夢想家たちのことを、日本人がこぞって忘れ去ってしまったと不満をもらしている。徳富にとって、こうした探検は、日本の植民地化の動きの一部というよりは、徳川時代に長らく抑えつけられていた、探究心と冒険心をあらわすものなのであった。

それまで読んで聞きおぼばかりであったものを発見したこれらの探検家たちは、どのような人物だったのだろうか。また、彼らをかきたてたものはいったい何だったのだろうか。これらの旅行と探検の数々は、近代日本の歴史とより広い世界との関係を明確にするためのプロジェクトの一部だったというのが本報告の主張である。このような探検の試みは、日本が植民地帝国を建設するために行った戦争の影にかくれ忘れざられることになった。実際のところ、多くの探検の試みは、帝国建設の動きの一部であり、それを正当化する役割になったのである。しかしながら、このように歴史を後ろ向きに記述することには、実際におこったことがすべての行為の必然的な帰結だと見えてしまうという危険がともなうため、こうしたことを誇張しすぎないよう心がけておかねばならない。

本報告では、19 世紀から 20 世紀への世紀の変わり目における、日本人とインド人の交流について検討する。それによって、日本が世界と結んだ複雑な関係を理解する様々な方法について考えたい。日本の近代史は、いわゆる西洋との接触という枠組みの中で語られてきた。この枠組みの中では、西洋以外との関係はすべて二次的で周縁的なものとみなされ、その近代史は支配的（ヘゲモニック）な西洋の世界観によって形づけられた。18 世紀末以来の政治的・社会的混乱は、外来の様々な思想と格闘するような、新たな思想潮流を生み出した。これらの思想潮流は、日本の近隣でヨーロッパによって行なわれていた戦争をいかに理解しそれに立ち向かうかという問題にも取り組むことになり、そのため「西洋」と「東洋」という枠組みについて理解する必要が生じたのである。

インドと日本の交流をみると、これら二つの民族が手

を結ぶための様々な動機と、相互理解がいかに形づくられたかが明らかになる。相異なる要因に駆り立てられた、こうした潮流は、インド人と日本人のあいだに、密接で知的刺激にみちた交流を生じさせた。このあまりかえりみられない歴史には、未来に向けての示唆を見出すことができる。この交流の歴史には、象徴的な 4 つの回路があった。その一つめは、アジアに文明をひろめたインドの役割を吟味し、それが新たなつながりの形成のためにどう役立つかを探求する営為から形成された。二つめには、ラビンドラナート・タゴールと岡倉天心の実り豊かな出会いとそれをとりまく展開である。三つめは大谷光瑞と日本人仏教徒たちの仏蹟調査に代表される。そして四つめは日本とその他のアジア各地に協力者を求めるナショナリストたちと革命家たちのものである。

これらの旅行や知的冒険は、錯綜する様々な回路の中で行なわれたものである。イギリスの植民地システムは、インドの拠点から、香港や中国の条約港へとその手を伸ばしていた。これは、19 世紀末以来の、東アジアと東南アジアを結ぶ、東京を中心とした植民地の秩序と重なり、緊張を生んでいた。これらの回路は、じつは西洋中心の枠組みの中に包摂されるものであった。自らを近代的であるとする日本の主張は、西洋の言説の枠内で組み立てられたものであったのである。しかし、当時のインドが一つの重要な要素として役割を演じていたアジアは、西洋の植民地支配からの解放のレトリックを形成する中心となっていた。インドにおいては、自らの優越性を主張する際には、寛容で非暴力的な文化帝国としての過去に基礎がおかれ、その主張はヒンドゥー・インディアの復活の理念に接続された。さらに、それはより広範な連帯を希求する欲望を形成したのである。

【記事執筆：ブリジ・タンカ

（インド デリー大学東アジア研究科教授）】



ブリジ・タンカ教授

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities « Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies: 'Japan-consciousness' in the Past, Present and Future »
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

9th East Asian Culture Research Meeting of 2010

“Forgotten Exchange between Modern India and Japan”

Presenter: Brij Tankha (Professor, Department of East Asian Studies, University of Delhi, India)

Date: Wednesday, 8 December 2010, 18:30-20:30

Location: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Center for International Japanese Studies)

In my talk I examined the interaction between Japanese and Indians around the turn of the 19th-20th century to think about ways of understanding Japan's complex relationship

with the world. The political and social turmoil in Japan from the late eighteenth century forced it to grapple with the stream of new ideas that flowed in, as well as with how to understand and cope with the wars being waged by Europe in her neighbourhood, and this critical situation framed the need to understand the 'East' as well as the 'West'.

In this churning the Japanese turned their attention to other parts of Asia seeking allies and solutions to the challenges that confronted them and building a history that bound them to the Asian region. In the interaction with India four circuits are emblematic: one, India as the source of an Asian civilisation and its use to build new bonds, the second, the meeting of Rabindranath Tagore and Okakura Tenshin and the search for a new language to represent Asian aspirations, the third, represented by Otani Kozui and the Japanese Buddhists search for the historical Buddha, the fourth circuit is that of nationalists and revolutionaries searching for allies in Japan and other parts of Asia.

Report by: Brij Tankha (Professor, Department of East Asian Studies, University of Delhi, India)

文部科学省私立大学戦略性研究基盤形成支援事業《基于国际日本学方法论的日本意识再探讨—日本意识的过去，现在，将来—》

研究课题3 “日本意识的现在—从东亚出发”

2010年度 第九次东亚文化研究会

“被遗忘的近代印度与日本的交流”

報告者：布里奇·坦卡(印度德里大学东亚研究科教授)

日 期：2010年12月8日(星期三) 18:30-20:30

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2楼 国际日本学研究所演習室

主持人：王 敏(法政大学国际日本学研究所教授)

虽说江戸时期海外的信息开始逐渐流入日本国内，但民众真正实现跨出国门放眼世界还要从明治维新后算起。

德富苏峰在1950年代有关大谷光瑞的著作中，大力赞扬了大谷的这种探险精神。大谷是西本愿寺的住持，在中亚探险的领域具有很大的影响力。然而在日本人的记忆里像大谷这样具有探险精神的梦想家都被一一遗忘。德富对于大谷的褒扬从某种程度上是在表达一种不满。

关于这些探险家的经历，探险的动机以及探险与近代日本・世界的历史的关联到底怎样？本次报告将19世纪末20世纪初的日本人与印度人的交流作为研究对象。通过分析日本与印度的交流的情况，我们可以发现两个民族相互携手的各种各样的动机。在日印交流史上有四点引人注目。第一，印度在文明传播过程中起的作用。第二，泰戈尔与冈仓天心的交流。第三，大谷光瑞与日本佛教徒的佛教遗迹调查。第四，向日本和其他亚洲国家寻求援助的革命家的事迹。

【执笔者：布里奇·坦卡(印度德里大学东亚研究科教授)】

전략적 연구기반 형성사업 《국제일본학 방법에 기초한 〈일본 의식〉 재검토—〈일본 의식〉의 과거・현재・미래》

연구③ 〈일본 의식〉의 현재—동아시아를 기점으로

2010년도 제9회 동아시아 문화연구회

잊혀진 근대 인도와 일본의 교류

보고자：브리지 탕카(인도 델리대학 동아시아연구과 교수)

일 시：2010년12월8일(수) 18:30 ~ 20:30

장 소：호세대학 이치가야(市ヶ谷) 캠퍼스58년관2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회：왕 민(王 敏, 호세대학 국제일본학연구소 교수)

본 보고에서는 19세기부터20세기로의 전환기에 일본과 인도의 교류에 대해서 검토한다. 18세기이후 일본의 정치적 사회적 혼란은 새로운 사상조류를 낳았다. 이러한 사상조류는 유럽이 일본근린에서 일으킨 전쟁을 어떻게 이해하고 대응할 것인가가 문제로 제기되었고 이를 위해서는 ‘서양’과 ‘동양’이라는 틀에 대해 이해할

필요가 생긴 것이다.

인도와 일본의 교류를 보면 두 민족의 협력동기와 상호이해가 어떻게 형성되었는지를 알 수 있다. 상이한 요인하에 형성된 조류는 인도인과 일본인의 사이에서 밀접하고 지적 자극이 넘쳐나는 교류를 낳게했다. 이러한 역사속에는 미래를 향한4가지 상징적인 회로가 있다. 첫 번째는 아시아 문명을 전파한 인도의 역할을 음미하고 이것이 새로운 관계 형성을 위해 어떻게 도움이 되는지 탐구하는 것에서 비롯되었다. 두 번째는 라빈드라나트 타고르와 오카쿠라 텐신의 만남과 이를 둘러싼 전개이다. 세 번째는 오타니 고즈이와 일본 불교도의 불교유적 조사로 대표된다. 그리고 네 번째는 내셔널리스트들과 혁명가들이다.

【기사집필：브리지 탕카

(인도 델리대학 동아시아연구과 교수)】

戦略的研究基盤形成支援事業 研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

2010 年度第 2 回勉強会

「古代東アジアにおけるヒトとモノの動き —ヨーロッパ人によるアプローチ—」

● 報告者：シャルロット・フォン・ヴェアシュア（フランス国立高等研究院歴史学部教授）

● 日 時：2010 年 10 月 28 日（木）18：30 ～ 20：30

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：小口 雅史（法政大学文学部教授）

古代日本と東アジア世界の関係を考えると、だれしも遣唐使のことを想起するであろう。私は学生時代の日本からの留学生との出会いで日本に興味を持つようになり、また、日本との貿易摩擦のまっただ中、EU の東京代表部で半年間、研修生として日本に滞在していたが、それ以来、古代からの日本の外交の歴史に興味を持つことになった。それで 1970 年代にイナルコの大学院で、遣唐使のことを修士論文のテーマとして設定することになったわけであるが、当時、この問題については、克服すべき二つの論点があった。一つは、日本律令国家は中華帝国を模倣したものであり日本と中国の関係を同じ土俵の上で理解しようとする一方で、朝鮮半島は日本の属国であり日本よりも下位のものとして扱おうとすること、もう一つは歴史研究においては遣唐使こそが外交問題の中心であり、他の側面、例えば渤海や朝鮮諸国との交易・外交を二次的に扱うこと、である。

しかし私自身は日本の文化的環境や教育環境で育たなかったので、純粋に一から文字史料や画像資料をもとに東アジアの国際関係を見直すことができた。今回は遣唐使を中心に、それ以後の東アジアの国際交流を、16 世紀までを視野に入れて検討しなおしてみる。

当時の研究水準では、近世初頭までの日本の対外貿易については、以下のようなことがよく言われていた。

遣唐使時代は、唐からは、当時のハイテク製品を持ち返る。例えば螺鈿などは当時の最高級の技術であり、また中国製品だけではなくシルクロード経由のはるか西方の物産、錦や綾をもたらしている。そしてその技術を学んで織部を全国に派遣して、その織り方を教え、中央政府への貢ぎ物を作らせたのだ。こうして、当時の最新技術が日本全国へ普及することになった。ついで宋代になると、宋の商人が日本との間を往復するという、遣唐使時代とは逆の動きをみせるようになる。高級絹織物は引き続き輸入されたが、香薬や陶磁器も大量にもたらされるようになった。宋代の青磁は日本で高く評価され、中国産や東南アジア産の麝香・白檀などの香料は公卿の需要が多く、お香合わせなどに盛んに用いられた。鎌倉時代には、建長寺船などの名目で「入唐船」が派遣された。泉州で沈没船の発掘がなされているが、輸入品の中心は宋銭であったことが知られている。12 世紀以降、日本人が一番欲していたものが銭貨である。日本では皇朝十二銭以後、貨幣が作られていないからであり、この「外貨」が頼りであった。室町時代になると、勘合貿易と言われる明との貿易が盛んになる。倭寇対策が必要になったが、大規模な貿易であり、やはり大量の明銭が日本にもたらされた。これは朝貢貿易であったので、輸入する権利は幕府が独占している。明の陶磁器も上流階級で珍重され、茶

会が盛んに催された。ただし茶釜は日本製である。これらの輸入品は、普通の商人は入手不可能で、室町将軍が自分の権威づけに利用し、北山文化・東山文化が栄えることになった。

これが当時の一般的な日本歴史上の貿易観である。ところがここまでの話に朝鮮が全く出てこない。これは歴史学として正当な扱いであろうか。たしかに当時の研究者は中国以外にはあまり興味がなかったので、朝鮮は東アジアの一員でありながら、その研究が全く遅れてしまっていて、これは大きな問題であると考え。

また上記の文脈では、「唐物」にばかり興味が集中していて、逆に日本から外に持ち出されたものの話が全く出てこない。これは欧州人にとっては実に不思議なことである。現代でも欧州には日本車や日本製カメラがあふれている（欧州にも素晴らしい自前の車やカメラがあるのになぜ欧州人は日本車を買うのか、このことも私が遣唐使の研究を始めたきっかけである）。古代でも日本が何を輸出したのかに注目すべきである。

そこで最初に 7 世紀から 16 世紀までの間に、日本に来航した使節・商人・来寇・漂流者などの数と、日本から渡航した使節・商人・倭寇などの回数（量ではない）を、対象を朝鮮半島・中国・渤海とに分けて比較してみた。すると全体の数としては、12 世紀までは日本への来航者が多く、13 世紀以後は日本からの渡航者が多いことが明らかである。しかも対象別にみると 8 世紀までは朝鮮や渤海との往来の方が中国との往来をはるかにしのぐことがわかり、また 15 世紀以後においても朝鮮との往来の方が中国よりはるかに多い（ただし史料の性格や内容などによって、確率的に精度が高いのは 8 世紀と 15 世紀前半だけであることは注意する必要がある）。時代を古代に限定して、また往来者を使節団に限定してみても、その傾向は全く同じである（7 世紀の新羅との使節往来は、朝鮮側に史料がなく『日本書紀』によって計算した）。このことだけをみても朝鮮との関係が日本にとってとても大きな意味を持っていたことがわかる。

それをふまえてあらためて日本と東アジア諸国との貿易内容を考え直してみた。まず朝鮮半島から日本に来るものについて。古代新羅からは蜂蜜や人参、あるいは山羊・驢馬・鸚鵡といった珍獣が注目される。渤海からは毛皮（豹と虎の毛皮、これは中継貿易）や人参、蜂蜜など。中世になると、朝鮮からの木版大蔵経が重要である。これは威信財としての役割が中心で、必ずしも宗教的意味を持つとは限らない。

さて問題の日本からの輸出品を考えてみる。中国への輸出品として注目できるものは、まず扇である。寧波経由で中国に輸出された。団扇は中国から日本に渡来したが、それを折りたたむための便利な扇に変化させた

のは日本人の知恵であって、中国で人気を博した。漆器も、正倉院宝物以来、日本に逸品があり、もともと中国渡来の技法であるが、螺鈿を用いた漆器は中国になく、日本で発達した技法である。渡宋僧裔然が中国に持参したものが有名であるが、11世紀になると高麗王への贈答品にもなる。また日本刀も忘れることはできない。例えば欧陽脩の詩の中に日本刀が登場する。室町時代になると、明銭を輸入するために日本刀を盛んに輸出した。明が数量を制限しなければならないほど大量であった。このころはさらに日本の屏風も中国で珍重された。中国には衝立て形式のものはあったが、扇同様、折りたためる形式にしたのは日本人の発明である。中国側から日本へ発注されることすらあった。和紙も中国で珍重された。製紙はやはり中国から学んだ技術であるが、それを、材料を始めとして独自に改良した。朝鮮からも和紙の技法を学びに来ている。

以上のように、紙も螺鈿も漆も、もとは中国から来たものであるが後に中国に輸出できるほどの独自の発展を日本で遂げた。刀ももとは朝鮮からもたらされたもので、鍛冶の技術も中国や朝鮮から学んだものであるが、やはり独自に発展させて中国に輸出するようになる。東アジアのものの動きは、単に遣唐使が日本に何をもたらしたかだけではなく、このように日本から何が外に出て行ったのかを抜きに語ることはいけないのである。

欧州人の日本研究は、細かい分析と言うよりは、日本人よりも自由に広い視点から東アジア全体を捉え直せるところに意味があるように思う。今後こうした視点からさらに研究を深めていきたい。

【記事執筆：小口 雅史（法政大学文学部教授）】



ヴェアシュア教授



ヴェアシュア教授（奥・講演）、
小口雅史教授（左奥・司会）、
安孫子所長・教授（左手前）



会場の様子

Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities « Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies: 'Japan-consciousness' in the Past, Present and Future »
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

2nd Study Meeting of 2010

“Movement of People and Objects in Ancient East Asia: a European’s Approach”

Presenter: Charlotte von Verschuer (Professor of Japanese History, L’Ecole Pratique des Hautes Etudes, France)

Date: Thursday, 28 October 2010, 18:30-20:30

Location: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: OGUCHI Masashi (Professor, Hosei University Faculty of Letters)

Consideration of exchange between ancient Japan and the East Asian world has always concentrated on issues regarding China and on what was brought across

from China. However, if we compare the number of envoys, merchants, pirates and castaways etc. that sailed over to Japan from 7th to 16th centuries with those Japanese that visited the Korean Peninsular, China and Bo Hai, we find that until 8th century traffic with Korea and Bo Hai surpassed that with China, and the same can be said for after 15th century. Just this shows that relations with Korea held much meaning for Japan.

Exports from Japan are also greatly characteristic. Export fans and screens were designed to conveniently fold up, such Japanese wisdom gaining popularity in China. Lacquerware too, originally from China, saw techniques developed in Japan absent in Chinese lacquerware. It is also noteworthy that Japanese *washi* paper, a prized item in China, learnt from Chinese paper-making technology, but made its own improvements. It would seem that Japan research undertaken by Europeans, rather than centering on detailed analysis, is significant in being able to take a wider and freer view of East Asia as a whole than Japanese tend to do. We hope for further research of this kind and from this viewpoint.

Report by: OGUCHI Masashi (Professor, Hosei University Faculty of Letters)

文部科学省私立大学戦略性研究基盤形成支援事業《基于国际日本学方法论的日本意识再探讨—日本意识的过去，现在，将来—》

研究课题 4 “日本意识的三角测量—面向未来”

2010 年度第二次研究会

“古代东亚の人・物往来—欧洲人の视角—”

報告者：夏洛特・冯・维尔舒亚（法国国立高等研究院历史学部教授）

日 期：2010年10月28日（星期四）18:30-20:30

会 場：法政大学市谷校区 58年館2楼 国际日本学研究所演習室

主持人：小口 雅史（法政大学文学部教授）

在探讨古代日本与东亚世界的交流这一问题时，通常人们会将视线集中在日本与中国的交流上。但如果将七世纪至十六世纪间，到达日本的节度使，商人，漂流者的人数，与从日本出发的节度使，商人，倭寇等的人数区分为二，并将交流的地域分为朝鲜半岛，中国，渤海三地区来考察的话，就会发现，到八世纪为止，日本与朝鲜，渤海地区的交流要胜于与中国的交流。此外，十五世纪后日本与朝鲜的往来远多于中国。可见，日朝关系对于日本极具意义。

日本的出口商品同样具体很大的特点。出口商品扇子和屏风不同于从中国进口来的扇子和屏风。其在形状上发生了改变，变成了折叠式的。另外，和纸也是中国传来的制纸技术上改良而得的产物。欧洲人的日本研究比日本人的研究更具广度和自由度。

【执笔者：小口 雅史（法政大学文学部教授）】

전략적 연구기반 형성 지원사업 《국제일본학 방법에 기초한 〈일본 의식〉 재검토—〈일본 의식〉의 과거・현재・미래》
연구④ 〈일본 의식〉의 삼각측량—미래를 향해

2010 년도 제 2 회 연구회

고대 동아시아의 사람과 물자의 이동—유럽인에 의한 어프로치

보고자：샤를롯테 폰 웨아슈어（프랑스국립고등연구원 역사학부 교수）

일 시：2010년10월28일（목） 18:30 ~ 20:30

장 소：호세대학 이치가야（市ヶ谷）캠퍼스 58년관2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회：오구치 마사시（小口 雅史，호세대학 문학부 교수）

고대 일본과 동아시아 세계의 교류를 생각할 때, 종래에는 아무래도 중국문제에 관심이 집중되었었고 중국에서 어떤 것이 들어 왔는가에 초점이 맞춰져 왔다. 그러나 7세기에서 16세기까지의 사이에 일본으로 도향한 사절, 상인, 내구, 표류자 등의 숫자와 일본에서 도향한 사절, 상인, 왜구 등의 회수를 한반도, 중국, 발해를 대상

으로 나누어 비교해 보면 8세기까지 조선이나 발해와의 왕래가 중국과의 왕래보다 훨씬 능가했다는 것과 15세기이후에도 조선과의 왕래가 중국보다 훨씬 많았다는 것을 알 수 있다. 이것만으로도 조선과의 관계가 일본에 매우 큰 의미를 갖고 있었다는 것을 알 수 있다.

일본에서의 수출품에도 큰 특징이 있다. 수출품인 부채와 병풍은 중국에서 일본으로 수입된 철부채, 칸막이를 접을 수 있도록 편리한 형태로 변형시킨 것으로 이러한 일본인의 지혜가 중국에서 인기를 모았다. 칠기도 원래는 중국에서 들어 온 기법이었지만 나전을 이용한 칠기는 중국이 아닌 일본에서 발달한 기법이었다. 일본 전통종이（和紙）도 중국에서 귀하게 여겨졌는데 제지는 중국에서 배운 기술로 재료를 비롯하여 일본에서 독자적으로 개량했다는 것이 주목할 만 하다. 서양인의 일본 연구는 세밀한 분석이라기보다는 일본인보다 더 자유롭고 넓은 시점에서 동아시아 전체를 재분석하는 것에 의미가 있다고 생각한다. 향후 이러한 시점에서 심도있는 연구를 하고 싶다.

【기사 집필：오구치 마사시

（小口 雅史，호세대학 문학부 교수）】

ブリジ・タンカ教授の研究所訪問

● 日 時：2010年10月12日(火) 午後
● 場 所：法政大学国際日本学研究所 (HIJAS)

インドと日本の交流の歴史を次々と掘り起こしておられるデリー大学のブリジ・タンカ教授が法政大学国際日本学研究所 (HIJAS) を訪問されました。広いインドでもこの人を超える知日家はいないとあまねく認められるところです。日本は近代化の過程で西洋に傾斜しましたが、足元のアジアを大切にす人もいました。中国だけでなく古代文明を生んだインドのどっしりした文明の土壌にも気づき、岡倉天心は実際に現地を踏んだのです。現在の教授も日本自体を研究の舞台とされ

て、なんども足を運ばれています。多忙な研究の日々を送っておられる中での訪問は、本研究所の主催による東アジア文化研究会(12月8日)での報告に関する打ち合わせのためでした。専門の日本近世史をベースに「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討」のテーマをめぐって流暢な日本語でご見解を示していただきました。

【記事執筆：王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)】

Visit to the Center by Professor Brij Tankha

Date: Tuesday, 12 October 2010, pm
Location: Hosei University Center for International Japanese Studies (HIJAS)

Continuing to bring to light exchange between India and Japan, Professor Brij Tankha of University of Delhi made a visit to Hosei University Center for International Japanese Studies (HIJAS). It is widely acknowledged that there is no one more knowledgeable on Japan in the whole of India. While Japan inclined towards the West in the process of modernization, there were those who still treasured their roots in Asia. Okakura Tenshin

realized that not just China but India too possessed a solid civilization that had emerged through ancient civilization, and visited its shores. Likewise, Professor Tankha's research interests are Japan itself, and has set foot here many times. He found time in his busy schedule to visit the Center to arrange his presentation at the East Asian Culture Research Meeting (8 December). He gave his ideas, in fluent Japanese, on the theme of "Re-examining 'Japan-consciousness' based on Methods of International Japanese Studies" based on his specialization of Early Modern Japanese history.

Report by: WANG Min (Professor, Hosei University Center for International Japanese Studies)

布里奇・坦卡教授的研究所访问

日 期：2010年10月12日(星期二) 下午
地 点：法政大学国际日本学研究所 (HIJAS)

从事印度与日本交流研究的专家，德里大学的布里奇・坦卡教授造访了法政大学国际日本学研究所。虽说日本的近代化具有明显的西洋化的倾向，但是在日本也有学者

表现出了对亚洲的关注。冈仓天心就是其中一人。冈仓不仅对中国感兴趣，对于古代文明的发源地印度同样也极为关注并作了实地考察。布里奇教授为了对日本有更深刻的理解，多次来到日本进行考察。本次访问法政大学国际日本学研究所的一个重要目的是就即将在12月8日举行的东亚文化研究会的会上报告内容作一个事前讨论。

【执笔者：王 敏 (法政大学国际日本学研究所教授)】

브리지 탕카 교수님의 일본방문

일 시：2010년10월12일(화) 오후
장 소：호세(法政) 대학 국제일본학연구소 (HIJAS)

일본과 인도의 지속적인 교류 확대에 기여하고 계신 델리대학의 브리지 탕카 교수님께서 호세대학 국제일본학연구소를 방문하셨습니다. 넓은 인도에서 이분을 능가하는 일본지식가는 없다고 인정받고 있다. 일본은 근대화 과정에서 서양에 치우치기도 했지만 인접해 있는 아시아를 중시하는 사람도 있었다. 중국뿐만이 아니라 고대

문명을 낳은 인도의 탄탄한 문명적 토양에 눈을 뜬 오카쿠라 텐신(岡倉天心)은 실제로 현지를 답사했다. 현재 교수님도 일본을 연구무대로 하여 여러차례 일본을 방문하고 계신다. 바쁘신 연구활동 와중에 본 연구소 주최 동아시아문화연구회 보고에 관해 협의하기 위해 방문해 주셨다. 전문분야인 일본 근세사를 바탕으로 '국제일본학 방법에 기초한 〈일본 의식〉 재검토'라는 테마에 관해 유창한 일본어로 의견을 말씀해 주셨다.

【기사집필：왕 민 (王 敏, 호세대학 국제일본학연구소 교수)】



左より 安孫子所長(教授)、ブリジ・タンカ教授、王 敏教授

ニュースレター NO.14 翻訳者紹介

(英語翻訳)

バーバラ・クロス (ロンドン大学 SOAS)

(中国語翻訳)

陳 毅立 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)

(韓国語翻訳)

金 英美 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)

新刊案内

国際日本学叢書 14

『転換期日中関係論の最前線—相互発展のための日本研究—』

表紙 熊 峰 (ゆう・ほう)

目 次

巻頭言 相互発展のための日本研究、相互学習としての日中(中日)研究…………… 王 敏

はじめに

* GDP の変化に伴う日中相互認識の調整へのアプローチ…………… 王 敏

序 論

* 中国の発展モデルをいかに評価するか…………… 趙 啓正

I 転換期を迎えた日中関係の展望—政治・経済・民間交流

* 日本の政権交代と中日関係…………… 馮 昭奎

* 中日戦略的互惠と民間有効—理想と現実—…………… 劉 江永

* 「平成維新」と日本政治、外交傾向の評価分析…………… 高 海寛

* 二〇〇九年度中日経済貿易関係の回顧と展望…………… 呂 克儉

* 中日関係の安定発展に向けた「大いなる思考」と「小さな処方箋」…………… 黄 星原

* 民間交流—日中関係の基軸—…………… 蔡 建国

* 日本新政府の東アジア共同体構想およびその実現の可能性について—心理文化学の視点から—…………… 張 建立

II 日中・東アジア文化の考察—歴史、社会的背景から現況まで

* 中日文化交流史に見られる「自我」と「他者」—相互作用の四種の類型とその合意—…………… 黄 俊傑 (翻訳: 水口 幹記)

* 日本人の自己認知と知的文化特徴論…………… 尚 会鵬

* 中日間の心理メカニズム比較…………… 霍 建崗

* 二〇〇八年中国における日本社会と文化研究状況について…………… 林 昶 (翻訳: 千葉 明)

* 新時代における中国の日本文学研究与教育について…………… 譚 晶華

* 端午節の文化境界—東アジア文化の枠組みと無形文化遺産の間…………… 劉 曉峰

* アジアの声…………… 羅 紅光

おわりに

* 日中愛国心の違い…………… 王 敏

付録資料

* 『中日友好交流三十年』に見る中国人研究者の日本観…………… 玉腰 辰己

* 中国における日本研究—CNKI を活用した文献検索の現状と課題—…………… 及川 淳子



法政大学国際日本学研究所

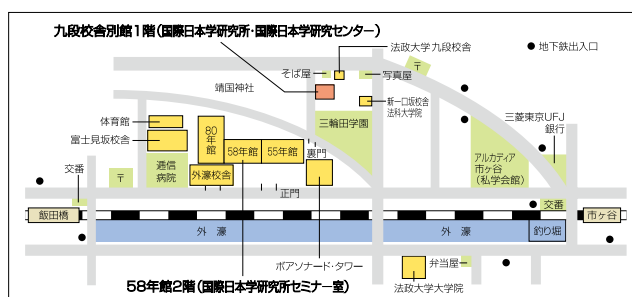
〒102-0073

東京都千代田区九段北 3-2-3 九段校舎別館 1 階

TEL : 03-3264-9682 FAX : 03-3264-9884

E-mail: nihon@hosei.ac.jp

URL: <http://aterui.i.hosei.ac.jp>



この冊子は再生紙を使用しています。